ビーファイターカブト　大作とフリオと幕間で

架助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ビーファイターカブト　大作とフリオと幕間で

【Ｎコード】
Ｎ８９６７Ｌ

【作者名】
架助

【あらすじ】
『ビーファイターカブト』――それは地球侵略を企むメルザード一族に対し、科学と昆虫の精を融合させた力で立ち向かう戦士たち・ビーファイターの物語。その中から、インセクトメダルに選ばれた新戦士フリオ・リベラと、前作『重甲ビーファイター』の主人公の一人であり『ビーファイターカブト』にもゲストとして駆けつけた先輩・片霧大作の二人に焦点を当て「本編中にこんなエピソードもあったんじゃないのかと勝手に活躍させるストーリー」をでっち上げてみました。一部オリジナル設定がありますのでご注意ください

（本編に抵触しない程度……のはずです）。また「残酷な描写あり」にしてありますが、『３６．５話「余興」』には残酷描写はありません。

キャラクター　一覧（前書き）

本作ではキャラクター1人に対し、呼称が複数存在する場合があります。
で、登場キャラクターの一覧を作ってみました。

●ビーファイター
●敵（メルザード一族）
●その他

の順で並んでいます。

キャラクター　一覧

●ビーファイター
――
・名前（モチーフ昆虫：カラーリング）　／　装着者名

という表記です。
――
・ゲンジ（ホタル：赤、黒、銀）　／　フリオ・リベラ　（『ビーファイターカブト』）

・ジースタッグ（クワガタ：緑）　／　片霧大作　（『重甲ビーファイター』）

@その他、『ビーファイターカブト』のビーファイター

・カブト（カブトムシ：金）　／　鳥羽甲平

・クワガー（クワガタ：銀）　／　橘　健吾

・テントウ（テントウムシ：紫）　／　鮎川　蘭

@その他、『重甲ビーファイター』のビーファイター

・レッドル（雌カブトムシ：赤）　／　高梨　舞

・ブルービート（カブトムシ：青）　／　甲斐拓也

●敵（メルザード一族）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

・名前（モチーフ：体色）

という表記です。称号は基本的に名前とセットなので省略。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

@幹部

・ライジャ（トリケラトプス：赤）

・デズル（古代魚：濃紺（に見える。黒？））

@ビークラッシャー

・キルマンティス（カマキリ：緑）

・ムカデリンガー（ムカデ：青）

・ビーザック（スズメバチ：黄）

・デスコーピオン（サソリ：赤）

@ボス（マザー）

・マザーメルザード（白）

●その他

――

・ブラックビート（カミキリムシ：黒）　／　シャドー（『重甲ビーファイター』）

キャラクター　一覧（後書き）

基本的に、拙作では「本編で、変身後に仲間から呼ばれている名前で、地の分も展開する」ようになっております。
シンケンジャーは、仲間同志では変身後にも本名で呼び合っているため、例えば志葉丈瑠がシンケンレッドに変身した後でも

「烈火大斬刀！」
丈瑠は巨大な刀を振り上げた。

というように、本名で書かれるわけです。
しかしビーファイターシリーズでは、変身後はアーマーの名前で呼び合っていますので

「行くぞ健吾！」
「おう」
甲平はビーファイターカブトに、健吾はビーファイタークワガーに超重甲した。
カブトは真っ直ぐに敵に突っ込んで行く。
「あ、カブトお前、ガスの元栓締めてきたか？」
「こんなときになに言ってるんだよクワガー！」
カブトは言いながらカブトランサーを振り上げるが、敵の怪人が不安げに足を止めた。
「やべ、そういえば締めて来なかったかも」
クワガーは呆然と呟いた。「メルザードスって、ガスの元栓とかあるんだー……」

という風になります。（くだらない例文コントの内容はさておいて）
以降このように超重甲が解除されるまで地の文も「カブト」「クワ

ガー」表記になります。
セリフの呼称と地の文の呼称が統一されていた方が言動が誰のものか判り易いためですが、ずっと変身後だと「これ誰だったかな」と変身シーンまで戻らないといけなくなるのではないか、と思いました。
『重甲ビーファイター』『ビーファイターカブト』両方をご覧になり、確実に記憶されている読者の方でしたら誰が誰かすぐお判りいただけることと思いますが、どちらか片方しかご覧でない、もしくは記憶が曖昧な方には有益なのではと思います。
なんせ、１４～５年前の作品ですから……。
見易さの改良・キャラの追加についてのご要望、間違いなどありましたら、遠慮なくお聞かせください。

ブラックビートが敵に分類されていないのはこだわりです（笑）。
登場人物紹介まで含むと、却って雑然としますので、いたしません。
呼称が一つしかないキャラ、登場しないキャラについても割愛いたしました。
キャラについてもっと詳しくお知りになりたい場合は、Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　等をご参考になさってください。
この機会に本編を観なおしてみるのも楽しいですよ！（と、三角マークの廻し者になってみる・笑）

３６．５話　「余興」（１）（前書き）

※注意！※

この小説は『ビーファイターカブト』二次創作です。

内容は『重甲ビーファイター』を踏まえたつくりになっております。

『ビーファイターカブト』だけご存知でも読めるようにしているつもりですが、両方をご存知の方がより深くご理解いただけると思います。

本編３６話「卑劣！！　魔兄弟の逆襲」と３７話の合間に挟まる話として書いておりますので、『ビーファイターカブト』を未見の方はお楽しみいただけないかもしれません。ご了承ください。

設定は基本的に本編準拠ですが、一つだけオリジナル設定があります。

といっても「インセクトメダルの戦士は『重甲ビーファイター』の戦士を知っている」これだけ。

（本文中でフリオ・リベラが片霧大作を知っている経緯は軽く語られます）

『重甲ビーファイター』の戦士たちの活躍やその後を考えると、メダルに選ばれてコスモアカデミア所属になった時点で会う機会があったり話を聞いていたりする可能性は大いにあると思うのですよ！　ありますよね！？　あるという共通認識をお作りいただけたところで、本文をどうぞ。

36．5話　「余興」（1）

余興【よーきょう】宴会などで座興を加える演芸、隠し芸など。
――現代国語例解辞典第二版（小学館）

外宇宙からやってきた異次元侵略軍団ジャマール。
これに対抗すべく、対侵略者組織アースアカデミアは人間の英知と昆虫の特性を注ぎ込んだ外骨格生体甲冑・インセクトアーマーを開発した。
装着者三人はビーファイターと呼ばれ、各種の武器を使いこなし、一年の歳月を戦いに費やしてジャマールを退けた。
しかし。
ジャマールの侵攻は地球の奥深くへと影響を及ぼし、悪の超軍団・メルザードを二億年の眠りから目覚めさせた。
アースアカデミアはコスモアカデミアと名を改め、世界各地へ支部を増やすと同時にインセクトアーマーをネオインセクトアーマーへと改良し、ビーファイターの数を増加させてこれに臨んだ。
メルザードによる侵攻は激化を極めた。
ことに日本への攻撃は激しく、コスモアカデミア日本支部には三人のビーファイターが常駐すると同時に、各国のビーファイターが交代で応援に駆けつけていた。

そして今――
かつて倒したメルザード幹部二人が復活した。
メルザード一族の長男・恐竜武人ライジャ。
同じく次男・深海魚人デズル。
超古代の巨大戦力・大甲神カブテリオスにより難は逃れたものの、戦局は大きく変わろうとしていた。

とはいえビーファイターカブトの装着員・鳥羽甲平は未だ高校三年生である。
思い切り受験生。
守れ、地球の平和と己の学業。
「ＺＺＺｚｚｚ……」
いや、守れって。
寝ている場合じゃないって。
しかし教室の後ろから二番目真ん中の列の机に貼りつくように突っ伏したまま、甲平は起きる気配を見せない。
と、その肩を隣の席の少年が突付いた。
「おい甲平」
「へ？」
普段から高い声が更に上ずる。
甲平は慌てて教科書を盾にして、眠っている自分を隠そうとした。
「授業終わってる。三者面談、そろそろお前の番だぞ」
「なんだよもう、脅かすなよ」
甲平は顔を上げて目を擦る。「大体、三者面談なんてうちは誰も……」
「来てるみたいだぞ、おまえん家の人」
学友は扉の方を指し示した。
「家の人？　ゆいか？」
振り返って妹の姿を探す。両親は仕事でアメリカに長期滞在中なので、甲平にとっては現在、家の人といえば妹のゆい一人を指す。
だがそこにいたのはゆいではなかった。
割烹着を来た長身の青年が、浅黒い相好を崩して手を振っている。
「コーヘー」
ありえねえ。
甲平は頭を抱えた。

立ち上がり、彼に近寄る。他の学友が甲平を振り返った。
「誰、兄ちゃん？」
「甲平の母でーす」
「嘘つけアンデス出身！」
「羽村英もアルゼンチン出身なのに」
「そんな通じにくいネタはいいよ！」甲平は彼を見上げた。「なんでここにいるんだよ、フリオ」
フリオ・リベラ。
コスモアカデミア南米支部からやってきた、アンデスの考古学者にしてビーファイターである。
「君の家をホテル代わりにしているお礼。僕、家のことするよ」
「それ聞いた。もうそれ聞いた」
先日そんなことを言われながら、掃除のついでに掃除機で顔を吸い込まれて起こされたばかりである。
「で、三者面談。僕、保護者代わり」
「いや無理だろ！　家のことじゃないし！」甲平は小声でフリオを睨む。「だいたい、簡単に来るなよ学校に！　俺がビーファイターってバレるだろ！」
アクの強い外国人のクレームに慣れきっているものか、フリオはさらりと甲平の眼力をいなす。
「真面目に隠してないくせにー」
「うっ……」
返す言葉もない。
確かに時々――あくまで時々――人目も気にせずインセクトアーマーを使用している。正直、人を襲うメルザード怪人相手に人目を気にしていたら平和など守れたものではない。
「それでバレない、つまり、僕が来たくらいでバレない。問題ない。国際交流でホームステイって言えばＯＫ」
説得力のあるようなないような説得だった。
「確かに……いやでも国際交流でホームステイに来て三者面談に出

るっていうのは無理だろ！」
と、そのとき廊下を担任教師が歩いてきた。
「鳥羽、お前の番だぞ。そちらは？」
「甲平の姉、ハタチでーす」
「嘘ついた上に若作りした！」
二人のやり取りに、担任は目をしばたたかせた。

海底深く潜む巨大移動要塞メルザードス。
巨大生物の骨を組み合わせて造られたような白く禍々しい居城の中に、メルザードの長・皇祖女帝マザーメルザードはいた。
下半身は白い大蛇にも似た巨体、白い甲殻類を思わせる鋏の両手と真っ白の全身に、血の染みを二滴落としたかのように目だけが赤く吊りあがり、メルザードの怪人たちを見下ろしている。
怪人たちは皆、マザーの生み出した子供だった。
地球上から絶滅した生物の化石を食し、闇の力を与えて卵として産み落とす。絶滅の無念とともに石化した古代生物はマザーの胎を借りて怪人として甦るのだ。
そして、今。
深海魚人デズルがマザーの前に跪いていた。
背後にはアンモナイトの化石から生み出された従者の石貝侍従ドードが「デズル様の復活でゲスゲス」と、低い身長と触手を揺らめかせている。
傍らではトリケラトプスの化石から生み出された兄でありライバルの恐竜武人ライジャが様子を伺っていた。
「ライジャ、デズル。よう戻った。母は嬉しいぞ」
マザーメルザードは猫なで声を作った。「早う、あの憎きビーフファイターや人間どもを片付けて、この母を喜ばせておくれ」
「マザー」デズルは闇を含んだ艶の声で呼びかける。「マザーの御心を叶えるために、我らは甦りました。この命、再びマザーのため

に惜しみなく使う所存です」
「嬉しいことを言う」
「ですが、マザー。復活を果たした我々に、ささやかな祝いをしていただけませぬか」
「祝い？」
「はい。これを」
デズルは細い腕を差し出し、手を開いた。
黒い鱗の掌には、小さな二枚貝の化石が載っている。
「マザーに、我が兄弟として産みなおしていただきたく」
「そんな小さな、何の変哲もない化石で何ができる」
ライジャが鼻で笑う。デズルはライジャに一瞥をくれた。
「力なき化石であれば、力を与えてやればいいだけのこと」
「なに？」
「兄者も一度、おやりになったでしょう」
言いながら、ためらいもなくデズルは己の身体の鰭を一枚引いた。
「ふっ！」
当然、無傷では済まされない。皮が裂け、青い血が滴る。しかし平然と、デズルは鰭を恭しく差し出した。
「新たな力を得て甦った我が細胞を、この貝の化石と掛け合わせたら何が生まれるか――楽しみではございませんか」
「面白い」
マザーは喉の奥で笑った。
「悪くない余興だ。よかろう」
「ありがたき幸せ」デズルは頭を下げた。

街路樹の葉を鳴らして風が通り抜ける。
木漏れ日が柔らかな影を落とす並木道。
いつもなら秋晴れの爽やかな空気に誘われて、身体がうずうずとジョギングでも始めたくなるところだが、今は太平楽な顔でついて

くるフリオの様子に甲平はただ溜息をつくしかなかった。
頼み込んで割烹着は脱いでもらった。その下はいつもの、色合い鮮やかな模様の織り込まれたシャツに革のベストである。
目立つことには変わりない。
しかしアンデスの先住民インディヘナの風貌は黄色人種のそれに程近いので、インディヘナの血が濃いメスティーソのフリオは、服もそう派手に民族衣装というほどでもなく、頑張ればちょっとエスニック好きの日焼けした日本人にも見えなくはない。どのみち割烹着よりははるかにマシだ。
「結局、三者面談が殆ど、『第一回アンデスを知ってもらおうの会』になっちゃったじゃんよ」
「でも怒られなかった、良かった」フリオは満足げだ。
「……それもそうかなー」
確かに、親が居なくてどうするかという深刻な雰囲気にならなかったのはよしとすべきだろう。ただ気にかかるのは『第一回』の部分だ。まさか第二回をやる気があるのか。いやまあ、第二回があってもいいが三者面談中は如何なものか。しかしうっかり口に出せば実現してしまう気がしたので、甲平はそれ以上深く考えないことにした。
「にしても甲平、あの成績で、大丈夫？」
フリオが尋ねた。一応、担任から聞くだけのことは聞いていたらしい。
「早くビーファイターとしての戦いが終われば取り戻せると思うんだけどなあ」
甲平が目を逸らして嘯くと、フリオが甲平の目線を追いかけて覗き込む。「アンデスもいいぞ、甲平」
「なに、急に」
「甲平が大学落ちた時、かける言葉の練習」
「ひでえ！」
「あれ」フリオが急に視線を甲平の後ろへと向ける。

振り返る。背後には連なる並木の影と、その向こうのコントラストも鮮やかな日差しの中を往来する通行人が見えるばかりだ。
いや。
よく見ると行き交う人の中、一人だけ並木の一本に寄り添うようにして動かない人影があった。
がっしりとした体躯、シンプルなレザージャケット姿と、彫りの深い横顔には見覚えがあった。
「大作先輩？」
片霧大作。
メルザードが侵攻してくる5年前に、外宇宙からの侵略者ジャマールと戦ったビーファイター三人のうち一人だ。
現在はコスモアカデミアがヨーロッパの各所に設置した支部を廻って支援に当たっているが、時折メルザードとの戦いの支援のために日本へ帰ってくる。
その彼が――
「こんなところで、何やってんのかな」素直に疑問を口に出すと、フリオが梢を指差す。
「大作は元々、樹木医だ」
よく見れば確かに、幹をあちこち触ったり葉や土の状態を見たりしているようだった。
「樹のお医者さんってやつか。へえ、なんか意外。……って、あれ？　フリオ、大作先輩に会ったことあるのか」
フリオは曖昧に頷く。
妙に浮かないフリオの返事が怪訝ではあったが、そのときはさして気にとめなかった。大作に声をかける。
「おーい、大作先輩ー」
「おう、坊主」
大作はこちらに気付いて手を上げた。
しかし、ふと余所余所しく視線を逸らしたように見えた。気のせいだろうか。

「日本に帰ってきてたんだ」
「ん、ああ」やけに落ち着かない。
「拓也先輩や、舞先輩は？」と、大作とともにジャマールと戦った甲斐拓也、鷹取舞について尋ねてみても上調子に視線が彷徨い、落ち着かなく指はジャケットの袖口や裾を行き来している。
「え？」
「だから拓也先輩と舞先輩」
「あ、ああ。うん、あいつらも、ビートルベースで機器調整中だ。ビットの調子が悪いとかなんとか」
人工生命体ビットは、コスモアカデミア日本支部・通称ビートルベースのコンピューター内のプログラムで、怪人のデータなどを分析する能力を持っている。
「そっか。俺たちも今からビートルベースに行くところなんだけど、よかったら一緒に」
「いや、その、俺は」
どうしたのかと思っているとフリオが歩を進めて大作に近寄った。
すると磁石の同じ極が近づけられたかのように、大作はフリオが近付いた分だけ後ずさりに離れてゆく。
「大作」
フリオは少し困った表情で、首を傾げる。「なぜ逃げる」
「逃げてる、ってわけじゃ」
大作は目を逸らしながら口ごもる。
フリオはなおも大作に詰め寄る。フリオも大作もかなりの長身なので、二人が並ぶと壁のようだ。これがバスケットコートで、大作と同期の甲斐拓也も並べば、彼もかなり長身であるので、運動部の助っ人で鳴らしている自分でも抜けるか判らない――などと関係のないことを考えている間に、大作は非常にわざとらしく「あ、俺、まだ用事あるから」などと言って去ってしまった。
「なんだったんだ、あれ」
甲平は首を傾げる。

「やっぱり」フリオは振り返って、肩を落とした。
「何が、やっぱり？」
途方にくれた顔。「僕、大作に、嫌われてる」
「へ？」
「僕、大作に初めて会ったのは、コスモアカデミアの南米支部」
大作のいた梢の下に目をやって、フリオは話し始めた。

五年前、地球の地表の海も大気も剥ぎ取って死の星にしようと企んだジャマールが、異次元に繋がり全てを吸い込むジャマールホールという穴を宇宙に開けた。
しかしジャマールホールは完全に開ききる前に、大作と舞、二人のビーファイターによって破壊され地球は救われた。
そしてその破壊の瞬間、異次元から飛び散った八枚のインセクトメダル。
このメダルには大きな力が秘められていた。
八枚のうち四枚はメルザードの手に渡って悪の昆虫戦士・ビークラッシャー四人をそれぞれ戦士として選び、力を与えた。
残り四枚はコスモアカデミアが回収し、メダルに秘められた昆虫の精を注入して完成させたネオインセクトアーマーを作成。メダルに選ばれた戦士をそのネオインセクトアーマー装着者、つまり新たなビーファイターとして迎え入れた。
フリオはそのメダルに選ばれた戦士の一人だ。
しかしそれまでは駆け出しの考古学者だった。いきなり世界を守る戦士という大きな使命と、よく判らない最先端科学や未知の力のメダル、その力を秘めたインセクトアーマーに、フリオは戸惑っていた。
そこへ現れたのが、片霧大作だった。
普段はヨーロッパ支部を渡り歩いている大作だったが、樹木医としてのフィールドワークにも精力的に力を入れており、アンデスや

アマゾンの植物を見たくて来たのだと鷹揚な態度で話す大作からは、機械の匂いがしなかった。

――難しいこたあスタッフがやってくれっから、何も考えなくていい。

――フリオ。お前は今まで通りでいいんだ。

――このインセクトアーマーには、地球を守ろうとしてる昆虫達の魂が宿っている。

――ただ、自然の声を聞く。

――自然の中で感じることを、ただ感じて、動く。お前が今までやってたことだ、そうだろ？

そう諭して、大作は笑った。

「そうだったんだ」

甲平が言うと、フリオは頷いた。

「日本人、優れた技術で有名。僕も、日本人は機械が大好きで、最先端技術に囲まれた、頭のいい人ばかり、そう思ってた」

「あー、ありがち」

「でも大作は違った。彼は、樹や草、花の声が聞ける人。日本人にも、自然を大切にする心があること、教わった。けど」

フリオの表情が曇る。「日本で再会したら、ずっと、あんな感じ。僕を避けてる。……僕、なにか嫌われること、したのかな」

意外な一面を見た気がした。

ともに生活していればなかなかの暢気者である一方、自然や歴史に触れる時のフリオはどちらかといえば寡黙で、神秘性さえ感じさせる。

しかしどちらも平たくマイペースと括れるのだと思っていた。こんな殊勝な面もあったとは。

「人んちで割烹着を着て勝手に家事をする男がそこは気にするんだ

なー」
「あのきったない部屋でそれやって嫌われても、甲平が悪いから、別に。ベッドの下の本は処分してもイインデスカー？」
「判ったよ片付けるよ俺が悪かったよ」甲平は苦笑した。「気にいってるんだな、大作先輩のこと」
フリオは頷く。「あれだけ、自然を好きな日本人、そういない。それに僕の故郷、痩せた土地。樹木医の大作、アドバイスくれた。有難い」
「恩があるってわけかあ」
甲平は納得した。結局のところ、根は義理堅い性格なのだ、この南米人は。自分の家で世話を焼きたがるのも、大作を気にかけるのも根は同じなのだろう。
と――
不意に悲鳴が轟いた。
「甲平！」
「ああ」
二人は顔を見合わせると、悲鳴の方向へと駆けた。

３６．５話　「余興」（１）（後書き）

前書きでオリジナル設定は一つだけと書いていますが、フリオについては原作本編で触れられていない部分がありますね。メスティーソがどうとか。
これは架助の解釈ですので、オリジナル設定といえるかもしれませんがストーリーには全く絡まない、整合性を求める自己満足的なものですので、お気になさらずどうぞ。
また、一応いろいろ調べて書きましたが不備や不勉強な点を含むかと思います。ご了承ください。

36．5話　「余興」（2）

海沿いの公園。
潮風と穏やかな波の音が響き、金属のモニュメントが青い水面とともに陽光を照り返している。
しかし甲平とフリオが駆けつけたとき、不似合いな黒煙と逃げ惑う人々が二人の間を駆け抜けていった。
フリオが指差す。「メルザード！」
「なんだって！？」
指の先に、確かに異形の姿が見えた。急いで人の波をすり抜けて悲鳴の先へと進む。
公園の中央、広場で先刻別れたばかりの大作が、倒れた男性と、その娘と思しき少女を背に複数の怪物を相手に戦っていた。
海洋生物に詳しい者であれば、姿がエウステノプテロンやチョッカクガイに似ていることが判っただろうこの怪人は、デズル親衛隊の戦闘員だ。
少女はぐったりした男性に寄り添って本のような書類を握り締め、固唾を飲んで大作を見上げている。
大作は親子を庇いながら手を緩める暇もなくデズル親衛隊の攻撃を受けていた。
頭上に振り下ろされた剣に、咄嗟に踏み込んで柄を押し返しながら足を払う。
間伐入れずに振り返り、背後の親子に手を伸ばそうとする別のメルザード兵を殴りつける。
「大作先輩！」
甲平はポケットから紅白饅頭ほどの楕円の機械を取り出す。
インセクトアーマーを封じ込めたコマンドボイサーである。スロットにインプットカードを挿入して構え、「超重甲！」と掛け声を上げる。

音声コードに応じ、声紋識別により甲平の全身をネオインセクトアーマーが覆う。
甲虫を模した金色のビーファイター・カブトの姿となった。
カブトは大きく跳び、親子と大作の頭を飛び越えてデズル親衛隊との間に飛び込む。
「カブトランサー！」
声に応じ、アーマー背面に収納されていた、両端に矛状の刃が付いた槍が手の中に転送され伸びる。
親衛隊の二体を同時に薙ぎ払い、カブトは着地した。
と。
低い笑い声が響き、カブトは声の方を向き直る。
「ビーファイターども、貴様らはここで終わりだ」
聞き覚えのある声と同時に黒い姿がマントを翻した。
「デズル！」
「貴様らに似合いの棺も用意してやった、覚悟するがいい」デズルは細い腕を上げる。「行け、マルズリグル！」
背後から現れたのはぬめった緑色の怪物だった。
二本の触手をぬらぬらと蠢かせ、腰から下は蛇のように長くとぐろを巻いている。
マルズリグルはカブトと大作に近付く。
大作も懐から黒い機械を取り出した。コマンドボイサーの前身であるビーコマンダーだ。

カブトがデズル親衛隊を倒している間に、フリオは大作の背後で倒れていた男性の半身を起こしていた。
すぐに男性は目を開けた。少女がほっとした表情を見せる。「おとうさん」
「今のうちに、早く」
「はい」父親は頷いて起き上がり、娘の手を引いた。「静香、早く」

少女は本を握り締めて頷き、フリオの誘導でその場から離れ始めた。
少女の手を父親は必死で引いている。しかし大人の歩幅に子供がついてゆくのは難しく、ふとした拍子に少女は持っていた本のようなものを取り落とした。
「あっ」
ページがめくれ、風に数枚飛び散った。
「わたるの楽譜が」
少女は来た方向へと駆け出す。
「駄目だ！」
フリオは手を伸ばし、後を追おうとした。
「え！？」ビーコマンダーを掲げかけた大作も振り返り、こちらへ戻ってくる少女に目を見開いた。
その時。
マルズリグルの触手が素早く伸びて、カブトと大作、それに少女を絡め取った。
同時に凪いでいた海が不意に大きくうねった。
波しぶきを上げて飛び出してきたのは、岩と見まがうほどの、巨大な二枚貝だった。
よく見ればマルズリグルの長い身体の先、とぐろを巻いたさらに向こうは貝の中に繋がっているのが判っただろう。
しかし、しげしげと観察する隙もなく二枚貝がばくりと開く。
触手がその中へカブト達を引きずり込むが早いか、口は再び閉じてしまった。
「え」
一瞬の出来事だった。
フリオは己が目を疑った。「えええ！？」
「静香！　静香ー！」
父親が叫ぶ。
「ふはははは！」デズルが哄笑を上げる。「如何かな、マルズリグ

ルの棺は」
フリオは叫んだ。「静香ちゃん達を返せ！」
「そういきり立たずとも、すぐに返してやろう」
デズルは巨大な二枚貝を撫でる。「ただし、一部分だがな」
マルズリグルは再び触手をゆらりと伸ばした。

カブトは床に叩きつけられた。
触手が手を離して去ってゆく。
傍らに取り落としたカブトランサーを拾いながら立ち上がる。床は濡れた柔らかい素材だったため、衝撃は大したダメージにはならなかった。粘液がまとわりついて濡れるのが薄気味悪いという程度だ。
しかしネオインセクトアーマーを装着していたからこその程度であったらしい。傍らで、少女を腕に庇って大作が倒れている。
「大作先輩」
揺り起こすと大作も少女もすぐに目を覚ました。
「ここは……ってなんだこりゃ、気持ち悪いな」
大作が指を開くと水かきのようにぬらりと粘液が膜を作って垂れた。
辺りは薄暗く湿った生臭い空気に満ちている。
見上げると二本の柱がドーム型の天井を支えていた。
「でっかい貝の中だ」
カブトは呟く。「俺達、あのでっかい貝に呑みこまれちまったんだ」
少女が項垂れる。「おとうさあん」
「ああ、泣かないで。大丈夫だ、えっと、静香ちゃんだっけ」大作が慌ててとりなした。「俺達ビーファイターが必ず、ここから出してやるからな」
その時、不意に視界が拓けた。

いや、違う。
『一部分？　どういうことだ』
ややくぐもって、フリオの声が響いた。
ドーム型の天井に、外の様子が映し出されている。たった一人、デズルやマルズリグルと対峙しているフリオの姿が目に飛び込んできた。
「外の様子を俺達に見せ付けようってことか」カブトは己の拳を掴んだ。「ふざけやがって！」

一陣の風がフリオの髪を揺らして過ぎる。
フリオはわずかに振り返り、静香の父親に目で合図した。父親は慌てて頷き、やや離れた樹の影に向かって小走りに駆けた。
もっと遠くまで逃げて欲しかったが、娘が心配な父としてはこれで最大の譲歩だったのだろう。気持ちは判る。
フリオはデズルとマルズリグルに向き直った。
デズルが言葉を連ねる。「このマルズリグルは、中にいる者の最大の恐怖を形にして吐き出すのだ。――やれ！」
二枚貝にわずかな隙間が生じ、勢い良く煙が放たれた。
咄嗟に口を手で覆って目を閉じ、顔を背ける。
やがて不吉な足音が響く。
視線を前方に戻すとすでに煙は晴れ、代わりに巨大なムカデが身をうねらせていた。
背後には黒い帽子と黒いマントの男が立っている。
帽子で顔は見えなかった。それよりも、長い触角の間で獰猛そうな口をガチガチ言わせている巨大ムカデの方が当座の脅威だった。
「ふむ。悪夢二体か」デズルが顎を撫でる。「どうやら超重甲した者の恐怖は消化できないようだな。まあ、それも時間の問題だ」

「いやー！」
天井の映像から静香は顔を覆う。「ムカデこわーいー！」
デズルの言うことが本当なら、これはこの子の恐怖なのだろう。
カブトは内心ほっとした。メルザードの中には、ムカデリンガーという、まさにムカデ怪人というべき敵もいるのだ。そいつが現れていたら静香の恐怖もひとしおだったことだろう。
それにしてももう一つの、黒い帽子とマントの男は――と振り返る。
天井を凝視する大作の顔は、薄暗い中に映像の淡い光を受けて、酷く蒼褪めて見えた。
映像の中ではフリオがコマンドボイサーを掴んでいる。
と、大作が手の中に握ったままだったビーコマンダーを口元に持っていった。「フリオ！」
二枚貝の殻越しにも通信は届いたらしい。フリオが驚いてコマンドボイサーを見る。
大作は叫んだ。
「フリオ、他の奴らには知らせるな」
「ちょっと！　何言ってるんだよ、先輩！」
カブトは大作に詰め寄る。
「あんなのフリオ一人でどうにかなるもんじゃねえだろ！？　ビットが調子悪いってんならコスモアカデミアはメルザード反応を感知しねえだろうし、どうにかしねえと」
同時に自分の通信機能のスイッチも入れる。「フリオ、皆を呼ぶんだ」
「待て！」
「あ、俺が呼んでもいいんじゃん、俺が」
「待ってくれ！」
大作は頭を床に擦りつけるように下げた。「頼む、この通り」
「なんだよそれ」
呆気に取られて、カブトは大作を見る。

「なんでもいい、頼む。皆には、いや拓也と舞には」
大作は祈るように両手でビーコマンダーを握り締めた。「皆に連絡が行けば舞どころか拓也にも知られる、そうなる前に」
「拓也先輩がどうしたんだよ」
知られたくないのはまず甲斐拓也、続いて鷹取舞であるらしい。
カブトは跪いて大作の肩に手を置いた。
自分達より前から死線をくぐり抜けてきた先輩である大作の、こんな余裕のない姿は初めて見た。
大作は戸惑った顔を上げた。
と――
『判った』
ビーコマンダーから、静かな声が響いた。

フリオは通信を入れる代わりにインプットカードをインセクトコマンダーに挿入し、構える。
「超重甲！」
たちまちのうちに、ネオインセクトアーマーがフリオの身を覆う。
銀の身体に赤と黒のアクセントカラーを配し、蛍を模した光の戦士――ビーファイター・ゲンジだ。
光に吸い寄せられるように巨大ムカデが頭から突っ込んでくる。
ゲンジは一と跳びに躱す。地面を覆うアスファルトが薄氷のように割れた。
『ゲンジ！』カブト――甲平のやや高い声がアーマーのメット内に響く。『無茶だ！』
「大丈夫、やれるだけやってみる」
『でも』
「大作が頼むというなら、きっと、余程のこと」
そのままゲンジはムカデの頭に跳び乗った。「それより、僕、外で戦えば貝の中助けられない！」

ムカデの背が揺れる。
節に指をかけて揺れを凌ぐ。
『……こっちはなんとかする』
大作の声が応えた。『すまん、しばらく持ちこたえてくれ』
「判った！」
ゲンジは頷いた。

３６．５話　「余興」（２）（後書き）

一部、キャラで遊んでます。
判る人には判る、判らなくても全く困りません。ただ落として散らばるものを持ってるキャラにしたかっただけですので。
ちなみに『ビーファイターカブト』放映は１９９６年ですが、作中で『重甲ビーファイター』から５年後と語られているので、２０００年であると考えております。

36．5話　「余興」（3）

「なんとかってどうするんだよ」
カブトは困惑した声で大作を振り返る。
「俺だって、何も考えてない訳じゃねえ。ここが馬鹿でかい貝の中だってんなら、方法はある」
大作は粘膜の柔らかい床を踏んだ。
「歩きにくいな」言いながら柱へと歩いた。「これ、貝柱だろ」
「あ、そうか。こいつを壊せば自動的に開く」
「そういうこと」
「じゃあ早速やってみっか。先輩、静香ちゃん、離れてて」
カブトはカブトランサーを高速で振り回し、横薙ぎに斬り付ける。
「ライナーブラスト！」
肉がへこむ、煮え切らない手応えがカブトの掌中に残った。
柱は少し収縮しただけで変わらずそびえている。
「ええー、俺の必殺技なのに」
言いながらもカブトはランサーを背面に収納し、腰に提げている銃・インプットカードガンを抜き、インプットカードを挿入する。
「アタックビーム！」
銃口から眩しい光線が放たれる。
柱に当たると光線は火花を散らして跳ね返った。
「うわっ！」
大作が静香を庇って伏せる。
跳弾は天井に当たり、更に跳ね返って床に落ちた。
「危ねえー」大作が目を丸くする。
「ごめん。それにしても、ビームも駄目なのかよ」
カブトは肩を竦めた。「大作先輩、他になにか策は？」
「後はもう無理矢理貝の口をこじ開けるぐらいしかねえな」
「こじ開ける。って」

困惑して周囲を見回す。
口の境目は上下の殻の見分けがつかないほどぴったりと閉じている。
「先刻、少し開いたろ。見なかったか」
「あ！」大作の言葉に、カブトは手を打ち合わせた。「ムカデとあの黒い奴が出たとき」
大作は頷く。「そして、デズルの奴が言ってた『超重甲した者の恐怖は消化できない』。つまり」
「そっか、俺が超重甲を解除すれば、俺の恐怖が出て行くときに隙間ができる！」
「ああ。そうしたら俺のスティンガークローで引っ掛けて開けてやる。敵も一体増えちまうけどな。この中よりマシだろ」
「だな。さっすが先輩……って、あれ」
視界が赤く警告を発している。
カブトはヘルメットに触れた。「活動限界が近付いてる。やべえ、俺が解除しなくても、もうすぐ超重甲が解けちまう」
「デズルが言ってた時間の問題ってこれか！　急げ！」
大作はカブトと静香を壁の隅に追いやった。
改めて、ビーコマンダーを構える。
「重甲！」
大作の身体をインセクトアーマーが覆い、緑色の戦士・ジースタッグとなった。
「スティンガークロー！」
金色のクローを構え、ジースタッグがカブトを振り返る。「今だ」
カブトは頷く。「超重甲、解除」
カブトのインセクトアーマーが解除され、甲平の手の中にコマンドボイサーが残った。
と。
低く軋む音と同時に、髪の毛ほどのわずかな隙間が壁に生じ、光が一筋流れ込んできた。同時に甲平の身体の周囲から煙が湧き立っ

て、隙間から外へと流れる。
がきん、と硬質な音を立ててスティンガークローが隙間を捉えた。

ビーファイターゲンジは走りながらムカデの頭突きを紙一重で躱していた。
疾駆の軌跡を描いてアスファルトが砕けてゆく。
と――不意に、辺りを煙が覆った。
煙に撒かれてムカデが怯む。
煙の中から現れた影に、ゲンジは身構えた。
影は、ゆっくりと形を成した。
見覚えのある顔、見覚えのある姿、見覚えのあるエプロン。
「もーお兄ちゃん！　罰として、ご飯抜きだからねっ！」
甲平の妹の、ゆいだった。

「うわーごめんなさいごめんなさい俺が悪かった！」
甲平は思わずひれ伏した。
隙間にクローを挟んだままジースタッグが振り返る。「お前が怖いのって、ゆいちゃん？　あの可愛い妹の？」
「あいつの飯抜きは容赦ないんだよ！　俺、料理出来ないし！！」
甲平はジースタッグに詰め寄った。「最長一ヶ月半！　小遣いも底を尽き、頼みは友達が分けてくれる弁当と部活の助っ人で稼いだおごりのご飯だけで、もう死ぬかと……ああ、思い出すだけで腹が減るよ」
「……そんだけ期間があったら少しは料理覚えろよ」
ジースタッグの呆れた声が響く。「ってか、あの温和なお兄ちゃんっ子の妹がそんなに怒るって、どんだけ悪いことしたんだ、お前」
「おにいちゃん、かっこわるー」

「静香ちゃんまで！」
「静香ちゃん、この格好悪いお兄ちゃんにしっかり掴まって、外に出るんだぞ」
「格好悪いを強調しなくていいよ！」
言いながら甲平は静香を脇に抱え込んだ。「あれ？」
「どうした坊主」
「なんか動きづらくない？」
「あ、俺の気のせいじゃなかったのか」ジースタッグも頷く。「先刻から俺もそう思ってた。まあ、粘液で濡れて服が重くなってんだろ」
「それもそうか。さて、と」
隙間へ向かう。
ジースタッグは右手のスティンガークローに左手も添え、貝殻をゆっくりと持ち上げ始める。
ヘルメットの向こうから歯軋りが洩れた。腕が震えている。さすがに相当重いのだろう。
「……っ早く、行け……！」
「無理無理もうちょい開けて！　頑張れ先輩！」
「おじちゃんかっこいいー！」
「くそー！　喜んでいいのかヘコんでいいのか判らねえコメント来たー！」
勢いを増して貝殻が上がった。
急いで隙間を潜り抜け、甲平と静香が外へ出る。
眩しさに目を細め、最初に目に飛び込んできたのはゲンジに迫る巨大ムカデの姿だった。
「！　ゲンジ！」
ゲンジは暴走するジェットコースターのように突っ込んでくる頭を紙一重で躱してはいた。
だがムカデの巨大な尻尾もまたゲンジに向かっている。
「危ない！」

「坊主！」
ジースタッグは左手で腰の白い銃・インプットマグナムを抜いて甲平に放った。「キーは１－１－０だ！」
「キー！？」
「うぁっ」
左手を離した重みで、支えていた貝殻ががくんと落ちる。
スティンガークローを挟んだわずかな隙間だけの状態に戻ってしまった。
「先輩！」
「急げ、ゲンジが！」
「あ、えっと、キー、これか」
銃の脇にテンキーの青いボタンがあった。「えっと1、1、0、インプット」
押すが早いか、銃口からビームが迸る。
反動で甲平の背中が貝殻に叩きつけられた。「ってえ」
間一髪、ゲンジの背中に触れる前にムカデの尻尾に焼け焦げができた。ムカデがのたうち回る。
「やった！」
「よし！」
隙間の向こうからジースタッグが頷く。
しかし。
次の瞬間、手の中からインプットマグナムは消え失せた。
「え！？」
「活動限か――」
最後まで聞き取る前に、スティンガークローもまた消え失せた。
無情な音を立てて目の前で貝殻は閉じた。
「先輩！」甲平は思わず、目の前の巨大な貝殻を叩く。「大作先輩ーーっ！！」
貝殻はびくともしなかった。殻の厚さを思わせる、目の詰まった音がするばかりだ。

と、甲平は叩くのをやめて自分の拳を見つめた。
なんだか光っている。
「なんか、きれーい」
静香も自分の手や服を見ながら言う。甲平の手よりもはっきりと、艶やかで柔らかな光を放って見える。「かたまってる」
「ちょっと見せて」
甲平は静香の手を取った。なにか、光を乱反射するものでコーティングされているようだ。
「指、動く？」
「ちょっといたい」
「これ……もしかして」
呟いた甲平の傍らで低い含み笑いが聞こえた。
「真珠だ」
はっと顔を見上げると、貝の陰からデズルが不気味な黒い顔を出した。「このマルズリグルの体内の粘液を浴びつづければ、徐々に身体の周囲で固まって層になり、真珠になるのだ」
「なんだって」
動きにくさの正体はこれか。
自分が比較的、真珠に覆われていないのは、おそらく殻の中での殆どの時間を超重甲して過ごしたからだ。
甲平は背後に静香を庇いながら、デズルを睨んだ。
「貴様らは真珠になりそこなったか。美しい真珠をマザーに献上しようと思ったが、クワガタ一匹で我慢するとしよう」
デズルは喉の奥で笑う。
「粘液は真珠の細かな粒子となり、昆虫の精の働きを阻害する」
甲平ははっとして、ポケットからコマンドボイサーを取り出す。コマンドボイサーも淡く真珠色の光に覆われていた。
「しばらくは使えまい。その間に、貴様らを始末してやる」
デズルは手を上げた。「やれ、マルズリグル！」
マルズリグルの触手が迫ってくる。

心臓が跳ね上がる。
甲平は咄嗟に静香を抱えて、走り出した。

ビーファイターゲンジはのたうち回るムカデの攻撃を避けた。
尻尾が焦げ付いてなりふり構わなくなったムカデの攻撃が、マルズリグルの造った幻のゆいに飛んでくる。
「ゆいちゃん！」
ゲンジが思わず叫んだ。
ゆいはムカデの頭突きをくらって、あっさりと白い煙になって消えた。
幻とはいえ気分のいいものではない。一瞬のやりきれなさを払うべくゲンジは頭を振った。
その間にムカデは平静を取り戻したらしい。再びゲンジに向かって、ぞろぞろと蠢く無数の足で向かってくる。
「マックスフラッシャー！」
ゲンジは両腕から目くらましの閃光を放った。

甲平は樹の影に隠れた。
陸では殻が重くて一定以上動けず、長さが足りなくなったのだろう。触手は深追いしてこない。
小走りに静香の父親が駆けてくる。「静香！」
「おとうさん」
今度こそと親子は抱き合う。
「静香、大丈夫か、どこも怪我しなかったか」
父親は静香の肩や腕を確かめる。「なんだこの光るの」
「真珠です。命に別状はないはず」
「真珠？　なら酸、そうだ、酢で拭けば」
「あ、ですね」甲平は頷いて二人を促す。「今はとにかく早くここ

から離れて」
「はい、ありがとうございます」
父親は一つ頭を下げて、静香をおぶって駆け出した。
「俺はどうすっかなあ」
甲平はコマンドボイサーを見た。「酸つっても、ねえし」
超重甲した後なら、インプットカードガンになにかあったかもしれない。
記憶している限り酸のインプットカードはなかったが、昆虫といえば蟻酸など、酸を出すことの多い生物だ。昆虫パワーでどうにかできたかもしれない。
「でも今は無理だなあ」
ぼやいていると、応えるように甲平のポケットの中でコマンドボイサーが警告音を立てる。
『悪い、しくじった』大作の声だ。『俺も重甲できねえ。あいつら倒して、外からなんとかしてくれ』
「簡単に言うなよ〜」
甲平はコマンドボイサーを見る。「通信機能はなんとか生きてるけど、しばらく超重甲はできなそうだし。真珠の件、中で聞いてた？」
『ああ。便利な実況で』
「重甲や超重甲が解除されたのもその粘液のせいだ。あんまり浴びないようにしてくれよ」
『ここで言われても無理だな』苦笑が返ってくる。
甲平は溜息をついて樹の陰から様子を伺った。
いつの間にか幻のゆいがいなくなり、ビーファイターゲンジが孤軍奮闘している。
「やっぱり、連絡しちゃ駄目なのか？」
『……』
「なんでそんなに、拓也先輩に知らせたくないんだよ」
通信を通して、逡巡が伝わってくる。

ややあって、沈んだ声がボイサーから零れた。
『……仲間が死んだこと、あるか』
「えっ……」
『あいつは――拓也を殺した』
「は？」
甲平は首を傾げた。「生きてるじゃん、拓也先輩」
『生き返ったんだ』
「へえ」
『信じてねえな。まあいいけどよ。説明すると長くなっから』
悪い冗談にしては、大作の声はやけに昏かった。
「――」
甲平は改めて戦場の様子を伺う。
ムカデとゲンジの戦いをただ傍観している黒い男。
「よく判らねえけど……でも、だからって今ここでゲンジだけに任せてたら、今度はゲンジが死んじゃうよ」
『……そうか。そうだな』
悄然と声が響いた。『悪かった。呼んでいい』
「まあ、なんとか拓也先輩に知られずに、健吾と蘭が来てくれりゃいいけど無理だろうなあ」
甲平は肩を竦め、スイッチを切り替えた。「こちら甲平、メルザードが現れた。すぐ来てくれ、場所は」

ゲンジと巨大ムカデの追いかけっこはまだ続いていた。
走りながら周囲を見回す。
前方にベンチがある。
ゲンジはベンチに飛び乗った。そこへムカデの頭が飛び込んでくる。
ベンチの端がムカデの頭で地面にめり込み砕けながら、反対側がシーソーのように持ち上がる。

梃子の原理。
銀と赤のボディが宙を舞った。
「たあっ！」
ムカデの背に飛びつく。
本場のロデオでもここまで過酷ではないだろうという程に揺れるが、どうにか振り落とされないよう節に左手をかけた。
頭の方へ右腕を構える。
右腕にＣＤほどの巨大な口径を持つハンドカノン砲が出現する。
「ライトニングキャノン！」
激しい揺れに照準が二度三度と逸れる中、一瞬だけ照準と頭が直線状に重なる。その一瞬を、ゲンジは見逃さなかった。
光の砲撃が、ムカデの平たい頭に爆裂した。
ムカデの頭はきれいに吹っ飛んだ。
それはいいのだが、頭を失ったムカデは激しく身を捩った。
「うわっ」
わずかな節の差にかけていた左手が外れる。
地面に派手に叩きつけられ、超重甲が解除された。生身の肘がアスファルトで擦れる。
ムカデは目的なく、死後の筋肉の赴くままに身を捩っている。
フリオは起き上がろうと膝をついた。
と。
拍手が響き渡った。
「面白い余興だった」低い声が告げる。
アスファルトの上に浅く積もる乾いた砂を踏む音が近付いてくる。
フリオは声の方を見上げる。
青い水面の乱反射を背に、傍観していた黒い帽子の男がゆっくりとこちらへ歩を進めていた。逆光と帽子の陰で顔は判らない。
「貴様の力、光のそれか」
質問の意図が訝しいが、さんざん手の内は見られている。今更隠しても仕方がない。フリオは頷く。「そうだ」

「闇の力を持つ俺の敵に相応しい。貴様、名は」
「ビーファイターゲンジ」立ち上がりながら、視線は男から逸らさない。「フリオ・リベラ」
「俺はブラックビート」
男は帽子を取った。「シャドーだ」
フリオは驚愕に目を見開いた。
帽子の下の顔は――ビーファイター・ブルービート、甲斐拓也のものと瓜二つだった。

樹の陰で甲平も、大きな目を更に大きくしていた。
「拓也先輩！？」
『いや』
コマンドボイサーから流れる大作の声が否定する。
『奴はシャドー。……ジャマールが造った拓也のクローンだ』

36．5話　「余興」（4）

背中を汗が走る気がした。
目の前の黒い男に、隙は感じられない。薄く笑みすら浮かべ、挑戦的にこちらを見据えている。
戦いへの餓えと喜びに充ちた気迫が肌を差す。
フリオは拳を構え、一歩右に動きながら、視界全体でシャドーの一挙一動をも見落とすまいと注視した。最初は拓也と酷似していることに驚きもしたが、こうして対峙していれば、物静かで穏やかな彼との共通点は顔しかないとも取れる。
応じるようにシャドーもフリオからみて左へと歩を踏み出した。
海からの風がフリオとシャドーの間を流れ、髪を揺らして過ぎる。
遠く、鴎が鳴く。
それが合図だった。
一と跳びにフリオはシャドーの影に飛び込む。
左フック、右フックと矢継ぎ早に入れた傍から手で払われる。
だが、払われることを前提にフリオは次の行動を用意していた。
払い終わるより早く右踵は頭上に上がっており、払ったシャドーの手をも押さえ込むように振り下ろす。
更に身を翻し、中段回し蹴りに繋ぐ。
右足は正確な弧を描いてシャドーの頭を捉えた。
しかし左手が弾き返した――と思ったときにはフリオの懐にシャドーの顔が迫っていた。
右拳が飛んでくる。
咄嗟に左手で払う。
直後の痛烈なジャブには対応が間に合わなかった。よろめいた脇腹に、間伐入れず膝が入ってくる。
ずしりと重く息も出来ない衝撃に、なんとか背後に飛びずさる。
抉られた脇腹を押さえる。右腕にも違和感を覚えた。以前の戦い

で少し痛めていたのを悪化させてしまったらしい。
それにしても。
フリオはシャドーを凝視する。こちらが肩で息をしているのに対し、両手を軽く振ってみせたシャドーには呼吸の乱れひとつない。途方もない敵を相手にしてしまったのではないか、という気がしてきた。
シャドーは口の端を歪め、黒いコートのポケットからなにか取り出す。
それは大作や拓也のビーコマンダーと酷似していた。
構えて、声を上げる。「邪甲！」
瞬く間にシャドーの全身を、カミキリムシを模したと思しき、金属質の光沢を放つ黒と銀の鎧が覆った。
「ブラックビート……そうか、ビーファイター……」
フリオは呆然と呟く。
黒と銀の戦士が頷き、掌をこちらへ向けて、指で招く。「第二ラウンドといこうか。ビーファイターゲンジ」
フリオもインセクトコマンダーを取り出し、構えた。
「超重甲！」
再び、銀と赤のビーファイターが現れた。

「あいつも重甲した！」
甲平の叫びが通信をＯＮにしたままのコマンドボイサーへ流れ込む。
「健吾達、何してんだよ～、早く来いよー」
ブラックビートの繰り出す鋭い爪のついたワイヤーの武器・ステインガービュートが宙を舞い、ゲンジに襲いかかる。翻弄されながらも、ゲンジはライトニングキャノンで応戦している。
大作の声が悔しげに響いた。『俺があいつと戦うつもりだったんだが……ヘマさえしなけりゃな』

「にしてもクローン作って戦わせるなんてなあ。ジャマールってのは酷い奴等だったんだな」
『拓也は、シャドーを自分の影だと言った』構わずに大作は話す。
『自分の細胞から生まれたシャドーが悪であったことで、自分がその悪の部分を持っているんだってな』
「拓也先輩の言いそうなことだなあ」
『シャドーもまた、自分は影だと言っていた。拓也を倒して自分が唯一の存在、光になるのだと。拓也は責任を感じ、自らシャドーを倒した……そのときに一度、命を落としたんだ』
「で、よく判らないけど生き返ったんだろ、結果的に」
『ああ。だが……』
大作の声が沈む。『あいつの一部分はそこで、そのまま死んじまったような気がする』
「え……？」
『一緒にメダルを持って逃げたとき、坊主、お前拓也に説教しただろ』
「説教って、そんな」
ただ腹が立っただけだ。

――俺にもしものことがあったら、このメダルを必ずコスモアカデミアへ届けるんだ。

異次元から飛び散った八枚のメダルを奪い合い、メルザードと争ったときのことだった。

――もしもって何だよ。そんなこと考えたくねえよ。

己の命を犠牲にしようとする拓也に、腹が立った。
命を諦めて欲しくなかった。

『いや。真っ当だよ』
大作の声が応える。『でもな。五年前、ジャマールと戦ってたときのあいつは、簡単に命を犠牲にするような奴じゃなかったんだ』
「え？」
『どっちかといえば、すぐ命がけでどうにかしちまおうとする俺をいつも止めてた。希望を捨てるな、って』
「想像つかないや」
拓也はいつも理知的で冷静で、もし計算の結果が「自分が犠牲になれば全てうまくいく」とでも出ればごく自然に、吸った息を吐くように命を捨てる。そんな人間に見えていた。
『今のあいつはシャドーを……自分の影を倒したことで、より「光」であろうとしている気がする』
「光……」
『より正しく。より人のために。より自分の命を惜しまず。そんな奴になって、人間味って言葉で許されるちょっとした悪の意識や、自分の楽しみとか、命とか、そういうもんを大事にする部分が死んじまったんだ。あの日から』
だから――
『だから、怖いのはシャドーってわけじゃねえ。むしろ言ってやりてえことが山ほどある』
『言ってやればいい』
息を切らしながら割り込んできたのは、フリオの声だった。
『ゲンジ』大作の声が上ずる。『聞いてたのか』
「俺が通信、ゲンジにも通してたんだよ。当然だろ」
甲平はゲンジを見る。
砂塵の中キャノンを構え、ゲンジはブラックビートと真っ向から向かい合っている。
「今、ブラックビートと戦ってるのはゲンジだ。あいつに勝つためにも、ゲンジには知る権利がある」
『そうだな』

『大作、言え』
ゲンジが言う。『俺が、通信の音声を外へ流す』
『……ありがとよ。フリオ』
大作は話し始めた。

『シャドー』
今までとは違った声に違和感を覚えたか、ゲンジの目の前で、ブラックビートはわずかに首を傾げた。
「その声、覚えがある。ジースタッグだな」
『そうだ』
「貴様には用はない」
『俺にはあるんだよ。てめえの下らねえこだわりに振り回された者としてな』
「下らない、だと？」
『ああ下らねえよ』大作の声が吐き捨てる。『俺は樹木医って職業柄、クローンなんて山ほど造ってんだ』
「何が言いたい」
ブラックビートが一歩こちらへ近付く。
『植物のクローンはな、同じ土壌に並べて育てても全く同じ枝ぶりになんてなりゃしねえ。けどよ、ちゃんとどっちも美味い実をつける。それでいいじゃねえか』
声は怒鳴る。『それをてめえが拓也の影だなんて言うから――てめえが影であることを選んだから、拓也は光にならざるを得なかったんだ！　今も引き摺ってよ……下らねえにも程があらぁ！！』
怒鳴る。
『どっちも光でいいじゃねえか！　お前だって、一緒に生きてて良かったじゃねえか！　なにがいけなかったんだよ！』
咆哮といってもいいような声だった。
密林の闇に響く獣の咆哮は、時に啾々と響く。

「――」
スティンガービュートが、ゆっくりと下がる。
波の音が響く。
二万年前も、五年前も、今と同じように波は寄せては返し、潮の匂いを運んでくる。
「俺は」
ブラックビートがなにか言いかけた、その時。
緑の触手が、背後からゲンジの首と身体を捉えた。
「ぐっ！」
マルズリグルの触手だ。
デズルの哄笑が響く。「今だ。マルズリグルより出でし恐怖よ、ビーファイターを倒せ！」
ゲンジのインセクトアーマーが激しく軋みの音を上げた。
「ぐぁ……っ」
全身を絞られる感覚に、呻きが洩れる。
赤く染まる視界は、半ばインセクトアーマーの警告のものか己の眼のせいか判らない。警告音が絶えず耳元で鳴り続ける。
ブラックビートは腰から銃を抜いた。「ジャミングマグナム」
「ゲンジーっ！」
樹の陰から甲平の声が響いた。
ジャミングマグナムの銃口からビームが発せられる。
光弾は真っ直ぐに伸びる。――マルズリグルの本体へと。
「！？」
奇声を上げてマルズリグルは触手からゲンジを落とした。
地面に叩きつけられるも、肺腑に流れ込む新鮮な空気に五感がクリアになるのを感じる。
「貴様、なにを！」
「うるさい」
ブラックビートは続けてデズルの足元へもビームを放った。火花が爆ぜ、デズルは咄嗟にマントで身を覆う。

無茶苦茶だ、と思いながら、注意が自分から逸れている間にゲンジは立ち上がった。デズルも同じことを思ったらしく、声を荒らげる。
「馬鹿な、貴様は幻だ、我々は貴様の造り手、いわば生みの親。幻が造り手の支配を受けぬはずが……」
「生みの親か。いい記憶のない言葉だな」ブラックビートは肩を竦める。「幻であれ何であれ、ブラックビートとしての名と姿を与えたものを支配できるなどと思うな」
「なに……！？」
メタリックブラックの姿がビュートを振るい、敢然と言い切った。
「たとえ誰であろうとも、この俺を利用しようとするのであれば、倒すまでだ」
「おのれ」
デズルはマントを翻す。「マルズリグル、ここは貴様に任せた」
黒い深海生物の姿は忽然と掻き消え、巨大な殻を持つ貝の化物一体のみが立ちはだかった。
ブラックビートがゲンジを振り返る。
「あいつを倒すぞ」
「しかし」
ゲンジは口ごもった。
シャドーがマルズリグルの能力により成り立っている幻なら、マルズリグルの消滅とは、すなわち――
だからどうした、とばかりにブラックビートは軽く顎をしゃくった。
「あいつは気に食わん」
有無を言わせぬ口調だった。
「……判った」
ゲンジは頷いた。
二人のビーファイターは、居並んで同時にファイティングポーズを構える。「行くぞ！」

「なんか共闘始まっちゃった！」
甲平がコマンドボイサーに向かって怒鳴ると、細い声が返ってきた。
『……だな』
「あれ、なんか元気なくなくない？　大丈夫か、大作先輩」
『ああ。ただ、固まってきて、口があんまり開かねえ』
「ってそれ、近いうちに窒息？」
『かも』
「うわやべえ！」
甲平はコマンドボイサーに叫ぶ。『ゲンジ！　急いでくれ！』

「ジャミングマグナム！」
「ライトニングキャノン！」
光と闇の弾丸が迸り、緑色の軟体の上に爆ぜた。
耳障りな悲鳴を上げてマルズリグルは蠢き、こちらへと触手を伸ばしてくる。
ゲンジは一歩躍り出て、両肩を光らせる。
「マックスフラッシャー！」
その肩を踏み台に、ブラックビートが高く跳んだ。同時に右腕のスティンガービュートのワイヤーが硬化、ソードモードとなる。
逆光を浴び、マルズリグルからはいっそう黒い昏い影と映ったことだろう、触手で顔を覆って避ける間もない。
ビュートは触手ごと、マルズリグルの身体を縦真っ二つに斬り裂いた。
着地し、火花を散らして苦悶するマルズリグルを背に立ち上がる。
ビュートを一振りして右腕に納める。
後光のように、背後で爆風が上がった。

甲平は樹の陰から飛び出した。
マルズリグルの殻部分は白い灰と化し、潮風に洗われ、跡形もなく崩れ去ってゆく。
やがて灰の中に、真珠の光沢を放つ人型のものが現れた。
大作だ。
「大作先輩！」
甲平が駆け寄る。
ゲンジも超重甲を解いて駆け寄った。
大作の身体には、やや厚く真珠色の殻が張り付いているものの、全く身動きできないというわけではなさそうだった。こちらを認めて「よお」と笑う。
「大作、なんか高級そう」
「高く売れるかな」甲平が言うと、フリオが首をかしげた。
「マニア向け？」
「うるせえよ、お前ら」
と――
がしゃり、と金属音が近付き、一瞬で空気が冷える。
メタリックブラックの鎧が、黒ずくめの姿へと戻った。三人は息を呑んで、動向を見守る。
黒いコートの腕が、すっとフリオの顔の前を横切って大作へ差し伸べられた。
大作は首がよく動かないためか、上目遣いに腕の主を見た。
「……シャドー」
ぎくしゃくと上がりかけた大作の腕をシャドーが掴んで、ゆっくりと引っ張り上げる。思いのほか丁寧な手つきだった。
両側から甲平とフリオが肩を支えた。
シャドーは大作を見据える。
「拓也は、光であろうとしているのか」

「ああ」
大作が応えると、シャドーは不意に微笑んだ。
「俺との約束を覚えているようだな」
「約束？」
「俺を忘れない、と。永久に」
シャドーは掌を見る。「俺は影として生み出され、影でない生き方を選ぶには時間がなかった。拓也が光であるということは、俺を覚えているということだ。俺にはそれ以外、自分が存在した証がない」
掌が煙を上げながら透き通ってゆく。
「忘れねえよ」大作は叫んだ。「俺だって」
シャドーは一瞬眼を見開く。
頬に、ふっと静かな満たされた笑みが上った。
改めて、やはり甲斐拓也に瓜二つなのだと思わされる穏やかさが垣間見えた気がした。それが見間違いではないと確認する間もなく、黒ずくめの全身は淡くなり、空気に溶けた。
三人の目の前に、陽光が惜しみなく降り注ぎ、波が眩しく乱反射した。
と。
「おーい！」複数の声が近付いてくる。
同じビーファイターであり、甲平の仲間である橘健吾と鮎川蘭、そして大作の仲間である鷹取舞と――甲斐拓也。
小走りに四人は駆け寄った。
「メルザードは？」健吾が尋ねる。
甲平は肩を落とした。「遅いよ、倒しちゃったよ、もう」
「全くだ。おかげでこの有様だ」と大作もぼやく。
「ごめんねー、やっとビットが直って駆けつけようとしたら、なんか頭のないでっかいムカデが暴れててさ」と手を合わせたのは蘭だ。
「戦いながら街の皆を避難させてたら煙になっちゃったけどね」と舞。

「え、あのムカデあれから、そっちに行ったの」フリオが頭を掻いた。
「なあ、大作」
拓也が尋ねる。「今、ここにもう一人いなかったか？」
「――」
大作は言葉に詰まる。
するとフリオが拓也を振り返った。
「いなかった」
「……」
甲平はフリオを見る。
フリオは甲平を見返す。真っ直ぐに射抜く力のある眼。「な、甲平」
甲平は頷いた。
「うん。いなかったよ」
「そうか」
拓也は海の方を見た。
波の反射が髪に映え、柔らかな光を纏う。
迂闊に触れれば、今消えたばかりの幻のように失われてしまう光に見えて、甲平はかける言葉を失っていた。

３６．５話　「余興」（４）（後書き）

次回で３６．５話　「余興」は終了です。
その後、別の回の間に挟まる話をもう一編用意しております。
これは「余興」よりちょっと長いです。
他にもいろいろ注意事項があるのですが……とりあえず「余興」が終わってから、また改めてご説明の場を設けさせていただきます。

36．5話　「余興」（5）

メルザードスの闇の中に再び足を踏み入れたデズルを迎えたのは、ライジャの冷笑だった。
「おめおめと逃げ帰ったか」
デズルは冷笑を返す。「言ったはずだ、これは祝い。ほんの余興だと」
「余興？」
「そうだ。さもなくばギドーバの一つも呼ばぬわけがなかろう」
正確には地上走行するものを暴走車ギドーバ、飛行するものをフライギドーバと呼ぶそれはメルザードの戦車である。ビーファイターがこれに対抗するにはネオビートマシンと呼ばれる巨大マシンか、大甲神カブテリオスの使用を余儀なくされる。
確かに今回それらの出番はなかった。
「本番はこれから」
デズルはライジャへ細い腕を伸ばす。「生まれ変わりし我の力で、ちっぽけな化石があそこまでの力を持った。我々兄弟が力を合わせれば、もっと強力なものができる。そうは思わぬか、兄者」
ライジャは驚愕し、デズルを見る。
憎み合うことで力を得てきた兄弟が今、力を合わせようというのか。
デズルは野心に燃える目でライジャに視線を返した。

静香達はコスモアカデミア経由で病院に搬送されたものの異常なし、一時は気を失った父親も念のため検査を受けたがこれまた異常なしの太鼓判を貰い、酸で身体洗浄を受けて帰宅したという。
甲平たち一同もコスモアカデミアへ戻った。拓也と舞は研究室へと戻り、健吾と蘭もいつもの作戦ルームへ向かった。

甲平と大作はコスモアカデミアスタッフから盛大に酢をかけられ乱暴に拭かれてシャワールームへと向かった。フィットネスクラブよろしく簡素なつくりのシャワールームで、個々に首から膝下までのパーテーションとカーテンで仕切られているだけだが、あるだけありがたい。

心地良い湯が真珠の欠片と酢を流してゆく。身体を包み込む湯気が酢の匂いがして時々むせるので、早く流してしまいたい。

頭を洗いながら甲平は大作に尋ねる。

「なー大作先輩」

「あ？」隣で身体を擦っていた大作が応える。

「なんか……お肌スベスベになった気がしねえ？」

「お前もか。真珠パックなんて豪華な目に遭っちまったからか、それとも酢のアミノ酸か」

「どっちにしろ若返ったって気がするよ」

「お前がそれ以上若返ってどうすんだよ」大作の手がパーテーションの向こうから伸びて、甲平の頭を小突く。

と、大作の横から声が割り込んできた。

「それは良かった」

「フリオ」大作が振り返る。

「僕も戦って、汗と埃まみれ。日本のシャワー、ちゃんとお湯出る、素晴らしい」

「それはいいけどよ」

大作はフリオを凝視する。

甲平も顔を上げた。

フリオの頭には青いシャンプーハットが嵌っている。どこから持って来たのだろう。まさかこれもコスモアカデミアの備品なのだろうか。

「なんの真似だ、そりゃ」

「知らない？　これつけると目に沁みないんだよ、凄くない！？」

「……素かよ。じゃあ仕方がねぇな」

大作は言いながら栓を捻った。頭上から勢い良く湯が流れる。
「大作」
フリオが呼ぶ。「僕、君の怖いもの、判った」
「いいよもう、それは」
大作は頭頂部から湯を浴びる。髪が顔を覆う。
「……仕方がねぇんだよ。素なんだから」
湯が全身を打ち付けて流れてゆく。
「忘れろなんて言えねえし、忘れられるわけもねえ。そして忘れるような奴じゃねえ。拓也はそういう奴で、だから俺達も拓也をリーダーに選んだ」
「――大作」
「あいつが光の宿命を背負うのなら、俺はその戦いを支えて一刻も早く終わらせることだけを考える。戦いさえ終われば、拓也も只の昆虫学者に戻れるさ」
顔を手で拭って、大作は薄く嗤う。「だから、もういい」
「良くない」
フリオの声は低く静かで、シャワールームの音の反響すらないように流れた。
「君も　ｇｒｉｅｆ　ｗｏｒｋ　の中にいる」
「――」
グリーフワーク。
拓也の抱えるものの重みに較べたら、大作や、おそらく同じ体験をした舞のそれは遥かに軽いものだろう。
それでも。
それもまた、『喪失（グリーフ）の痛み』と認めていいのだ、と。
重さを較べる必要はないのだ、と――フリオは単語一つで言ってのけた。
大作はシャワーに向かって顔を上げる。
「……充分だ」
暖かな人工の雨が全てを洗い流す。

雫が顔に降り注ぎ、頬を伝う。「ありがとな」
湯気の向こうで、フリオの表情が和んだ。
大作の肩越しにその笑顔を見た甲平も、思わず破顔した。
「なんだよ。結局、仲いいんじゃん。フリオと大作先輩」
大作の動きが止まる。
「結局、なんでフリオのこと避けてたわけ？」
「僕もそれ、聞きたい」
フリオが身を乗り出す。
両側から挟まれた男は眉をひそめて、甲平を振り返った。「坊主。お前はなんともねえのかよ」
「何が？」
「気付いてねえの？　自覚症状なし！？　っか～」
大作は溜息をついた。フリオに一瞥をくれる。
フリオは大作を凝視していた。
逡巡しながら大作の口が開く。
「……顔だよ」
甲平は目を丸くする。
高い声は一層高く、タイルに反響した。「顔ぉ？」
「お前には判ってもらえると思ったんだがな」
そして、大作は不本意げに話し始めた。
説明すること、ものの数十秒。
息をひそめて聞いていた甲平とフリオの顔が、次第にぽかんと呆れてゆく。
「そんなことかよ」
「そんなことって言うなよ、俺はもう、めっちゃ気にして」
「じゃあ」
シャンプーハットの男が、にやりと笑った。「こういうのは？」
三人は顔を見合わせ、ひそひそと相談を始めた。

それから準備すること小一時間。
三人は支度を整え、それぞれ道具を手に、廊下を歩いていた。
「なあ、本当にやるのかよ」大作がぼやく。
甲平も頷いた。「俺もさすがにここまでは、ちょっと～」
「二人とも、みっともないよ」
フリオが鼻で笑う。「やるからには、とことん！」
「判ったよ」仕方なしに大作は応えた。「こうなりゃなんでもやってやらあ」
やがて三人の足は研究室の前で止まった。
大作がノックする。「拓也。今ちょっといいか」
ドアの向こうからやや気のない返事が聞こえた。
「うん」
研究に没頭しているらしい。
「入るぞ」
言って、ドアの前からずれる。
段取り通り、先頭に立って部屋へ入ったのはフリオだった。続いて大作、甲平と中へ入る。
白衣の拓也が振り返りながら眼鏡を外し――その眼鏡をぽろりと取り落とした。
机を挟んで坐っていた舞が立ち上がる。「うっそお！」
「Ｂｕｅｎａｓ ｔａｒｄｅｓ！ Ｗｅ ａｒｅ ”Ａｎｄｅｓ Ｂ－Ｆｉｇｈｔｅｒ ＢＡＮＤ” ！」
フリオが笑って手を振る。
やけくそで大作も「ビーファイターバンド、イエー！」と拳を振り上げてやった。
三人はフリオから借りた民族衣装に身を包んでいた。とはいえ、持ってきたものの「日本は暑い」と着なかった、鮮やかな色が複雑に織り込まれたポンチョとつばのあまり広くなく平たい帽子を普段の服に重ねただけのお手軽コスチュームである。
さらに、フリオはケーナ、大作はギター、甲平はマラカスを手に

している。
ゆいに連絡して届けさせたのだが、事情を話したら面白がって楽器まで学校から借りてきてくれたのだった。
そのまま三人は演奏に入る。
フリオは戦いで痛めたらしく右手に包帯を巻いてはいたが、幸い指は支障がないようで、ケーナの上で淀みなく穴を押さえている。
曲は一番判りやすい『コンドルは飛んでゆく』――甲平がそれしか知らなかったのだ。しかし、さすが共通認識があるだけあって、練習もしていなかったがフリオに合わせて演奏するだけで、それなりにまとまった。
拓也は――
指を差して笑い始めた。
「ぶわはははははははは！！」
舞も笑う。「あはははははっ！！　い、違和感なさすぎーっ！」
「っていうか見ろほら舞、この中で一番あっさりしてるのが、フリオ！！」
「ホントだー！！　あはははははは！！」
大爆笑。
大ウケである。
そう、大作が気にしていたのはこれだった。
大作の顔は、良く言えば、彫りが深い。悪く言えば濃い。もっと悪く言えばくどいのであるが、幸いこれはまだ人に言われたことはなかった。
南米でフリオと出会ったときには、せいぜい現地民から「君は南米の人にも見える」といわれる程度だった。日本人の方が少なかったし、特に構わなかった。
しかし日本に帰って以来、やたら周囲から笑われて「フリオと並ぶと他人とは思えない」「どっちがアンデスから来たかわからない」とまで言われる。元々の地黒に加えフィールドワークで日に焼けているのと、背の高いフリオに身長がさして変わらないのも理由だろ

うが、あまりにも頻繁で辟易していたのだ。フリオが悪いわけではないので黙っていたが、それが却って誤解を招いていたらしい。
シャワールームで洗いざらい素直に話すと、フリオは安堵した顔になり、そして次に悪戯っぽく笑った。

――じゃあこういうのは？
――笑われるなら、いっそ笑わせる。
――持ちネタにする。
――それに、拓也も、

「っはっっはははははっ、あー腹痛い、涙出てきた」
拓也は身体を二つに折って腹を抱えて思い切り笑っていた。
全く屈託のない笑顔だった。
初めはやけだった大作も、頬が段々自然に綻んでいくのを感じていた。

――拓也も、
――思い切り腹の底から笑えるなら、きっと大丈夫。
――生きること、楽しむこと、全てが死んでしまったわけじゃない。

開け放したままだったドアから足音が近付いてきた。
「健吾さん、こっちこっち！」
「どれどれ。うわ！」
「あはっ、なにこれ、なんの騒ぎ？」
「季節外れの隠し芸大会かね」
列を成して入ってくる。
甲平の妹・ゆい、橘健吾、鮎川蘭、果ては司令官である小山内博士までやってきた。
改めてさわりだけ演奏しなおしたが、観客全員が笑いっぱなしだ

った。
「これ、笑いを取るのが楽だな」
大作が言うと甲平は頷いた。「出オチだけどね」
「健吾、横に並んで」
舞が健吾の背中を押す。「通訳！」
「さて今日は東京の新橋演芸場に中継が繋がっています。中継の橘さーん」
小山内博士が立て板に水の口調で咄嗟にアナウンスすると、健吾がボールペンを胸ポケットから抜いた。
「はい、こちら新橋演芸場です。こちらには現在アンデス・ビーフアイター・バンドが来日なさっております。早速日本の印象を伺ってみたいと思います。Ｈｏｌａ！ Ｗｈａｔ ｏｎｅ ｉｓ ｔｈｅ ｉｍｐｒｅｓｓｉｏｎ ｏｆ ｗｈｉｃｈ ｙｏｕ ｗｅｒｅ ｍｏｖｅｄ ａｂｏｕｔ Ｊａｐａｎ？」
ボールペンをマイクに見立てて父親が外交官で海外生活経験も豊富な健吾の英語が淀みなく流れる。
甲平が健吾の頭をはたいた。「ボケが長いよ！」
げらげら笑いながら拓也が手を振る。「甲平、そこは英語かスペイン語で答えないと」
「無理言うなよ！」
「今まで甲平はフィリピン人だと思ってたけど、アンデスもいけるな」はたかれた恨みか、健吾がボールペンで甲平の頬を突付いた。
「え、あたしタイだと思ってた」
「健吾、蘭、お前らそんな風に俺のことを！」
「あたし小さい頃、親に橋の下から拾ってきたって言われて信じてたもの」
「ゆいまで！」
「だから言っただろ、坊主」大作が甲平の肩を叩いた。「喜べ。今日の主役はお前だ」
「そんなーっ！」

早速、甲平が取り囲まれていじられている。
大作はフリオを振り返る。
「手、大丈夫か」
「平気。それより、これ思ったより、僕もすごく面白い」
フリオは甲平を見て、微笑んでいた。
「アンデスから来たのが、僕だけじゃないみたいな気がしてきた」
「フリオ」
どこか遠くを見るような目に、大作は今更ながらフリオの心情に思い当たった。
独り地球の裏側にやって来て、異国の言葉を話している青年が、自国民に似た顔の、しかも自国で会った相手から邪険に去れたらどんな気分になるか。
「――悪かったな。くだらねえ理由で逃げ回ってて」
「全くだよ」
フリオは屈託なく笑って言い返す。「落とし前つけてもらわないと」
「……前々から思ってたけど、お前妙に日本語達者だよな。本当は日本人なんじゃねえのか」
「甲平の妹、十四歳でーす」
「ゆいより年下！？」
甲平が聞きつけて振り返った。
コスモアカデミアが笑いに包まれる。
平和はまだ遠い、十一月のある日の余興だった。

（完）

３６．５話　「余興」（５）（後書き）

英語は翻訳ソフトによるものですので、正直、自信なしです……。

さて、これで３６．５話「余興」は終了です。
ライジャとデズルの会話は、３７話「倒せ不死身の新怪人」にて二人が力を合わせて新怪人アラジビレイを生み出す、という展開に繋げています。

お読みいただきありがとうございました。
引き続き、今度は４５話と４６話の間、つまり４５．５話を投稿して参ります。どうぞ宜しくお願いします。

注意：次へ進む前に必ずお読みください

※注意！※

次から開始します、４５．５話「テオブロマ」について。
オリジナル設定がひとつ増えます！！
それは、

「フリオ・リベラには、故郷に妻子がいる」

というものです（「テオブロマ」作中では、妻も子もはっきりとは出てきません）。
これを踏まえ、鮎川蘭の描写もそれに伴ったものとなっております。
要するに『ビーファイターカブト』本編中で微妙にしか描かれなかった感のある恋愛要素を抜いて、代わりに少し父親っぽい要素を入れてみただけです。
フリオは本編中であまり個性が発揮できなかった感があるので、この方が、彼らしい形でキャラが立つのではないかと思ったのが、主な理由です。
「テオブロマ」のテーマが「親子」なことも理由の一つです。

また、本文には以下の要素を含みます。

・３６．５話「余興」を踏まえた形で、メダル戦士と『重甲』の先輩方は顔見知りです。
・片霧大作とフリオ・リベラがメインです。他のキャラの出番はあまり多くありません。
・暗い話です。
・ここからが「残酷描写あり」です。

・戦闘シーンは少なめです。

以上を踏まえて、読んでみてくださるかたは、どうぞ宜しくお願いします。

「余興」だけでいい、もしくはどちらも読む気がなさらないかたは、どうぞお気遣いなくお戻りください。また別作品にでもご愛顧いただけましたら、幸いです。

45．5話　「テオブロマ」（1）

睦月の寒さをものともせず、新東京文化ホールは賑わいを見せていた。

人の輪を離れ、若き考古学者フリオ・リベラはロビーの椅子に腰掛け、客の様子を眺めている。

この新東京文化ホールで今回開催中の古代アンデス文明展はフリオが企画し、実現まで数年の歳月を要した、言わばフリオの夢の舞台だ。甲斐あって地球の裏側に住む人々の興味も上々、冷たいビル風に鼻を赤くし手を擦りながらも期待に胸を膨らませた客たちが、展示物を指差しながら次第に遥か古代アンデスの世界へ没入し、目を輝かせてゆく姿は、千の賞賛や万の羨望も及ばない充実感のある収穫だった。

一方で、自分こそが客たちの瞳を羨ましく思うことに気が付いていた。

避けようのない灼熱の太陽を背負って土を深く深く掘り進み、乾いた砂を丁寧に刷毛で払ったその下から、吐息一つで崩れ去りそうなほどに繊細な遺跡の片鱗が姿を見せる瞬間の、どんな宝石にも換えがたい輝きを、客たちは今まさに感じている。しかし考古学者でありながらフリオ自身はここ一年半ほど、理由あって発掘の歓びへ直に触れることはなかった。まして今いるのは遠く見知らぬ先進国日本、故郷の仮面や壁画、織物はガラスケースの奥に並んでしまうと、もう懐かしい匂いひとつ伝えてはくれない。

思慕は故郷か遺跡へか、と問えば、迷わず両方と答えるだろう。フリオにとって故郷と遺跡は切り離しては考えられないものだった。

――Ｑｕｉｅｒｏ　ｖｏｌｖｅｒ．

その言葉を訳してしまわないようにフリオは呑み込んで、再び人

波へと目を向けた。
と、見慣れた顔が混じっているのに気づく。にこにこと相好を崩して歩み寄る眼鏡の顔に、立ち上がって笑顔を返す。
「Ｈｏｌａ．　来てくださったんですね、小山内博士」
「お疲れ様、フリオ。大盛況じゃないか」
パンフレットを握った手でフリオの肩を叩いた小山内勝博士は、地球レベルでの環境保護を目的とする対侵略者組織コスモアカデミアの日本支部長を務めている。
コスモアカデミアが――いや、このコスモアカデミアが侵略者と認め敵対するメルザード一族こそ、考古学者としてのフリオをフィールドワークから離さしめる原因だった。
メルザード一族は二億年の眠りから目覚めた悪の超軍団である。コスモアカデミアは世界各地へ支部を増やすと同時に、人間の英知と昆虫の特性を注ぎ込んだ外骨格生体甲冑・ネオインセクトアーマーを開発。世界各地にビーファイターの数を増加させてこれに臨んでいた。
メルザードによる侵攻は激化を極めた。
ことに日本への攻撃は激しく、コスモアカデミア日本支部には三人のビーファイターが常駐すると同時に、各国のビーファイターが交代で応援に駆けつけていた。
そしてフリオもまた、南米支部のビーファイター・ゲンジとして選ばれた戦士だった。
「ビーファイターとして戦わなければならないときに、僕のわがままを聞いてくださって、感謝しています」
フリオは小山内の手を握った。
「考古学者としては、僕、まだ半人前。なのに、企画が通ったのは、コスモアカデミアの後押しのお陰です」
「わがままなどと、とんでもない」小山内は暖かい手でフリオの手を握り返す。「長年の夢だったんだろう？　それに、歴史は地球の宝だ。これを守ることもまた地球を守るコスモアカデミアの務め。

立派な市民への活動報告だよ」
眼鏡の奥で片目を瞑ってみせる。「それに私も、実は楽しみにしてたんだ。黄金のインカ帝国、ナスカの地上絵。いやあロマンだねえ」
「楽しんで行ってください」
「ああ。でも、君はあまり楽しんでいないようだね」
見透かされていた。
「判りますか」
「判るよ。お客相手は飽きちゃうんだろ」
うだうだと脳内で繰り広げていた鬱屈を端的に表現されて、フリオは苦笑する。言い訳の日本語はなかなか咄嗟には出てこなかった。
「あー……」
「いいんだよ。こんな、ヒーターのフィルタ越しの、綺麗すぎる空気で一杯の狭苦しい建物の中に長時間閉じ込められるのは、君の性に合わないことぐらい、私にも想像がつくからね。そうだ」
ポケットを探り、携帯電話を取り出す。「私の知り合いの大学教授が、今、発掘調査をやっているグループに所属している。見学できるように頼んでみよう」
「本当ですか！」
「食いつきいいなあ」小山内が失笑する。「本当だよ。ただし、遺跡じゃなくてもっと昔の、恐竜だか始祖鳥だか掘ってるみたいだけど、それでもいいかい？」
「充分です」
フリオは力いっぱい首を縦に振った。
文明的な遺跡でなくても掘り方や機器の使用法など、参考になる部分はいくらでもある。それになにより、小山内の想像どおり、建物の中に居座るのにはいい加減辟易していた。
携帯電話でしばらく話し込んでいた小山内が通話口を手で塞いで顔を上げた。「大丈夫だそうだ。いつでも歓迎だというけど」
「じゃ、今から」

「今から？」レンズ越しで大きく見える目が、余計に大きくなる。
「はい！」
「判った判った。ちょっと待って」
小山内は電話に向き直った。
「今からってのは……うん、ありがとう。じゃ」電話を切る。「OKだって。知り合いは今日は研究室で現場にいないけど、現場責任者に話をしておいてくれるそうだ。地図を書いてあげるから。駅までの道、判るよね」
「大丈夫。地下鉄も、もう慣れました」
「頼もしいねえ」
小山内は背広の胸ポケットから手帳を出して一枚破き、万年筆で手早く地図を書いてくれた。受け取ると、インクがまだ乾ききらずに紙の上で光っている。大切に二度ふ、ふ、と息を吹きかけて乾かし、改めて眺める。
場所はそう遠くないようだった。
フリオは椅子の背にかけていた革ジャンを掴むと、色合い鮮やかな模様の織り込まれたシャツの上から羽織る。「Ｇｒａｃｉａｓ、小山内博士！　ごゆっくり！」
「気をつけて行くんだよ～」
手を振る小山内の姿に目もくれず、フリオはガラスのドアを押して寒空の下へと駆け出した。

闇の奥深く、巨大移動要塞メルザードスは無数の足を蠢かせていた。
中では落ち着かなく右往左往する姿がある。
悪の昆虫戦士ビークラッシャー。
黄色い雀蜂の姿と能力を持つ、変幻鎧将ビーザック。
緑の蟷螂の姿と能力を持つ、魔剣鎧将キルマンティス。
青い百足の姿と能力を持つ、冷血鎧将ムカデリンガー。

この三人が途方にくれた様子でいるのに対し、ビークラッシャーのリーダーであり、赤い蠍の姿と能力を持つ猛毒鎧将デスコーピオンだけは泰然と左腕のハサミスローターシザースを磨いている。
「デスコーピオン、なんとか言えよ」
ビーザックが黄色い手を振る。「俺たち、マザーのご機嫌を損ねて排斥処分寸前なんだぞ、判ってるのか」
メルザード一族の全能の神であり母である皇祖女帝マザーメルザードこそ、子である彼らの絶対の存在である。
しかし、地球の全生命を抹殺するというマザーの野望を叶えるべく彼らが起こす行動は、ことごとくビーファイターによって砕かれ続けている。
かてて加えて、これまでマザーは様々な生物の化石を食べ、力を与えて卵として産み落とすことで怪人を造りだし、一族を増やしていたのが、今やマザーが、祖である闇の意志の後継者となったことで化石を利用せずとも新たなる怪人・闇の波動の戦士を生み出すことに成功しており、この闇の波動の戦士を偏重することが多くなっていた。
相対的にビークラッシャー四人の立場は凋落し、進退窮まって現在に至る。ここで手柄を立てて、マザーの信頼と寵愛を回復しておきたいというのがビークラッシャーの総意だった。
だがビーザックの呼びかけに、デスコーピオンは鋏の爪を磨き続けながら呟いただけだった。
「誇りなき戦いでマザーの寵愛を取り戻しても空しいだけだ」
「言ってろ」
緑色の肩を竦めたのはキルマンティスだ。「貴様と話しているほうが余程空しい。やり方がどうであれ、斬ることこそ誇り。刃を乾かせてなにが誇りだ」
言いつつ構えた一双の鎌状の剣・フェリンガースナイプがぬめった光を照り返す。
「デスコーピオン抜きで考えるしかないようだな」

ムカデリンガーも頷いた。「なんか策がなけりゃ、闇の波動の戦士なんぞにいいところを持って行かれっ放しだ」
「新前のくせに生意気で、ムカつくんだよなあ、闇の波動だかなんだか知らんが」
ビーザックがぼやく。
後から生まれた者が大きい顔をするという点では、ビークラッシャーの態度も、兄にして二大幹部の恐竜武人ライジャや深海魚人デズルには過分なまでに尊大なのであるが、己のやることというものは人にやられると腹が立つものであるらしい。
キルマンティスも同意する。
「確かに今の我々に必要なのは、手駒として従順な兵力だ。マザーが化石から兄弟を生み出して下さっていた頃は、もっと御し易い者ばかりだったのだが」
「んじゃ、ここは恥を忍んでマザーに化石から兄弟を生み出していただいて――」
「いや」
ムカデリンガーが身を乗り出した。「どうせなら、まずその化石から、マザーの関心を惹こうじゃねえか」
「ほう」
三人は顔を見合わせた。
闇に邪悪な昆虫の声と爪の刃を研ぐ音だけが、淀むように響いていた。

４５．５話　「テオブロマ」（１）（後書き）

タイトルの通り、４５話「ＢＦ！！　歴史に挑戦」の直後の話となっております。歴史に挑戦した件は全く絡みませんが。

45．5話　「テオブロマ」（2）

対侵略者組織コスモアカデミア日本支部は、悪の侵略軍メルザード一族との攻防の最前線である。

たとえ現役高校生がメインルームでポテトチップ食べながらジュース飲みつつ参考書もそっちのけで雑談に興じていようとも。

何故なら、その高校生の鳥羽甲平こそ、日本のビーファイターのリーダー・カブトであり、一応れっきとした待機状態だったりするのだ。

雑談に相槌を打ちつつもコンピュータのモニターから目を離さないビーファイタークワガー・橘健吾と、二袋目のポテトチップが終わろうとしているビーファイターテントウ・鮎川蘭も彼の仲間で、同じくメルザードの攻撃に備えて待機している。

「なんだ、博士、今頃フリオのやってるアンデス文明展に行ってるのかあ」

甲平はジュースでポテトチップを嚥下して言う。「始まってだいぶ経つじゃん。遅いよ」

「小山内博士も忙しいんだよ。それに期間はまだ一週間近くあるじゃないか」健吾が笑う。「蘭はもう行ったのか？」

「あたし？　行ったわよ、初日に。すごい人で疲れちゃった」

「普段あんなに人と音がすごいゲーセンに通ってるくせに」

「モニタがあるのとないのとでは大違いですー」

メカニックも兼任する機械大好きの蘭は、甲平に向かって口を尖らせる。「それにしても、本当、大繁盛で良かったわよね。折角の晴れ舞台なんだから、奥さんとお子さんも連れて来れば良かったのに」

「へ？　誰の」

「だから、フリオの」

「え」甲平と健吾は目を丸くした。「なに、フリオって奥さんと子

供いるの！」
「あれ、知らなかったの？」
「知らなかった」健吾が言う。「蘭。いいのか」
「なにが」蘭はきょとんとした視線で首を傾げる。
「だって、お前、フリオに気があったんじゃないのか」
「あー」
蘭は苦笑した。「ソフィーね、余計なこと言ったの。まあ恥ずかしくてはっきり否定しなかったあたしも悪いんだけどさ」
ソフィー・ヴェルヌーブ、十七歳。フランスのビーファイターであり、大多数の若い女性がそうであるように恋愛沙汰が大好きである。
蘭がフリオからもらった葉書を大事に持ち歩いていたために、ソフィーは蘭がフリオに思いを寄せているものと思い、焚き付けて行ったのだ。
「でもあの葉書を、勝手に読んだくせにちゃんと最後まで読まないソフィーが悪いのよね」
「じゃあ蘭はフリオのことなんとも思ってなかったわけ」
甲平の問いに、蘭は首を振った。
「そりゃあフリオはいい人よ。でもあたしが好きなのはフリオじゃなくて……彼の」
照れ笑いで蘭は口に手を添え、小声で言った。
「セビーチェ」
健吾が尋ねる。「セビーチェ？　って誰」
「色気より食い気かあ～」甲平は頭に手を置いた。「健吾。セビーチェは人名じゃなくて郷土料理。ちょっとピリ辛なマリネって感じかな。フリオがうちをホテル代わりに泊まってるとき、たまに作ってくれるんだ」
「そうなのよ。甲平んちに遊びに行ったときたまたまご馳走になって、もうおいしかったのなんのって」
「ああ、中途半端に大食いだからなあ、蘭は」

納得して頷く健吾に蘭がチョップを入れる。「中途半端ってなによ、桜祭りの桜餅大食いチャンピオンに向かって！」
「そこにツッ込むのかよ」甲平が呆れる。「でも確かにセビーチェは美味いよな」
「ねー。魚介たっぷり、柑橘あっさりで日本人向け」
蘭は手を組んでうっとりと目を輝かせる。「あたし、フリオに葉書でレシピ送ってもらったの」
「だから葉書がどうとか言ってたのか。でも蘭、なら尚更、フリオの株が上がってたんじゃないのか」
「それがね健吾」
蘭が指を立てる。「フリオが言うには、本場で奥さんが作るセビーチェはフリオも目じゃないぐらいメチャ旨らしいのよ！　ああっむしろ奥さんをあたしの嫁に欲しい！」
「じゃあフリオの子と結婚してフリオんちの子になればー」甲平が気のない様子で言う。
蘭は真顔で答えた。
「それも考えたけど歳が下すぎるわよ」
「考えたのかよ……」
「それに日本食と日本の最先端コンピュータゲームを捨てられないもの、あたし」
「はいはい好きにして」
「でもやっぱりクイとかもいっぺん食べてみたいわよね」
「甲平、クイってなんだ」健吾が尋ねる。
蘭を白眼視しながら甲平が答えた。「アンデスのネズミってフリオが言ってた」
「ネズミかあ……チャレンジャブルだなあ」
「モルモットみたいだってよ」
「うわっ可愛い！　可哀相！」
健吾の脳天を再び蘭のチョップが炸裂する。
「健吾だってシドニー暮らしであの可愛いカンガルーを食べてたん

でしょ！」
「痛いなあ。蘭だって、オーストラリア行ったらカンガルー食べるだろ」
「食べるわよ！　当然よ！　丸かじりよ！！」
二人の言い争う姿を見ながら、「俺はやっぱり、ゆいのご飯がいいや」と、よくできた妹の料理を思いながら改めてしみじみとジュースを啜るのだった。

自分の家庭が話題となっているとも知らず――いや早々に家庭の話題から食べ物の話にスライドしたのだが――フリオは意気揚々と駅前の商店街を進んでいた。
頬を切る冬の風も随分と久しぶりで、新鮮に感じた。昼を過ぎたばかりなのに早くも斜陽になった淡い光が目に心地良く、足下をついてくる影も軽やかな気がしてくる。見上げれば木枯らしが街路樹から残り少ない枯葉を剥いで、水仙の花壇へ運んでゆく。
故郷は南半球、今頃は強い日差しの下で夏の花が咲き乱れているだろう。自然との調和を好む自分でも、さすがに時差と気温差の二段攻撃で感覚が参りそうだ。
だからだろうか。
改めて、ずいぶんと遠くに来てしまった、と思うのは。
ビーファイターに選ばれてから、日本と南米の往復を繰り返している。南米に戻ってもコスモアカデミア南米支部に詰めていることが殆どで、なかなか骨休めはできていない。おかげで日本に来れば来るほど、地球の裏側から自分を惹き付けてやまない引力が日々強まる。
中途半端で投げ出してきた遺跡の発掘、デスクに積んだままの資料、そして――
ふとフリオはショーウィンドウに足を止めた。
指紋一つなく磨かれたガラスの向こうには、黄色と青の子供用自

転車がこんなに小さくても一人前ですよと胸を張るように光っていた。補助輪がついていて、倒れないようになっている。

――そういえば息子の誕生日がもうすぐだったっけ……

古代アンデス文明展は来月の初頭までで、誕生日までに帰国することは無理だ。自分が企画した責任者であるため、放り出して帰るわけにもいかない。

出国の際に気づくべきだった。埋め合わせに、なにか珍しいお土産を買って帰ろう。

フリオは改めてショーウィンドウの奥を眺める。

この自転車なら、息子の身長に丁度いい。きっと喜んであちこち乗り回すだろう。

でもバースデイプレゼント兼お土産には、少し高価すぎるだろうか。これだけ大きければ飛行機に積めるのか判らないし、別便で送るなら送料もかかる。……吝嗇なわけではない。日本の物価の高さは正直とんでもなく痛いのだ。ホテル代わりに甲平の家に泊めてもらうのは、節約というよりは、異国に独りでホテル生活するのが不安だからだが。

でも息子の喜ぶ顔には代え難い。ちょっと頑張ってみようか。いやしかし。どうしよう。

しばらく葛藤してみたものの、結論は出なかった。

とりあえず自転車は候補に入れておくとして、またいろいろ見て廻ることにしよう。期間はまだある。

フリオは思い直してひとつ頷くと、ポケットから小山内の書いた地図を取り出し、道を確認しなおす。

ちょっと時間を使いすぎた。

歩調を気持ち速めてまた歩き始める。

このときあまりに色々考えていたために、道を挟んだ向かい側から様子を伺っている視線に、フリオは気づかなかった。

45．5話　「テオブロマ」（3）

街の喧騒を少し離れたごく閑静な地域、雑木林の丘の傍に、小山内の紹介した発掘現場はあった。

どうやら農地か宅地にするために丘を削ったら化石が出ちゃったという風情で、地層が複雑に入り組んでいるのが見える。そこから化石が出土しているようだ。ロープで仕切ってあり、プレハブが一軒立っている。おそらく調査隊の拠点だろう。

だが――様子がおかしい。

この平日の晴天昼日中に、発掘していると思しき人影が見当たらず、声や採掘の物音がまるでしない。寒鴉の嗄れた声と羽音だけがざわめいている。

フリオが怪訝に思いながら歩を進めると、地面の上、土嚢の隣に並んでいるのは中身の入った作業服だった。

周囲の土が赤黒く濡れている。

見回せば袋のように無造作に、幾人もの躯が転がって、地面を濡らしている。

北風に腥く鉄錆臭が混じった。

これは――

心臓が跳ね上がり早鐘を打ち始める。フリオは駆け寄って、倒れた肩を揺すった。

「おい！」

手ごたえもなく彼はこちらを向いて、濁った目で呼びかけに答えた。

こちらを映さないその視線が胸に刺さる。フリオは瞼を閉じてやった。かじかんだ手にも骸は冷たく感じられた。

「誰か」

立ち上がり、見回し、呼びかける。「誰か！」

誰か――いないのか。

この声に応える者は。
フリオはプレハブの方へと走った。中になら、誰か生存者がいるかもしれない。
しかし戸を開けた瞬間、目に入ったのは赤い壁だった。
甲高い無機質な音が響いている。薬缶がガスコンロの上で激しく白い湯気を吹き上げて笛を鳴らしていた。
お茶の葉の缶が転がり、茶葉を床と折り畳みの長机を組み合わせたテーブルに散らしている。もう口をつけられることもない白い湯呑に赤い飛沫が僅かに飛んで、染みを作っていた。
飛沫と壁の赤い染みを目で辿ると、その先に力なく落ちている赤い手があった。
何か紙を握っている。
近付いて覗き込む。
写真だ。
印画紙に焼きついて微笑んでいるその姿が、フリオには一瞬、自分の妻と息子に見えた。
ぎくりとして凝視する。
見間違いだ。
赤く染まっているとはいえ似ても似つかない。写真を握り締めたまま事切れている男性の妻と息子であることは容易に見て取れた。
それが、一瞬の動揺となった。
不意に背後で湧き上がった鋭い殺気に、咄嗟に反応が遅れた。
反射的に身を捩ったものの、右の肩口に熱い感触が走る。
「っ！」
振り返る。
禍々しい蟷螂の緑色が立ちはだかっていた。
「遅かったな、ビーファイター」
蛍光灯の光に、緑色が揺れて、やけに霞んで見える。
傷口が熱い。
熱くて熱くて息が上がる。

「……キルマンティス」
「貴様もこいつらの後を追え」
静かに、胸に刃が入ってくる。
やけに時間が緩慢に感じられる。抗わなくてはと思うのに、腕が重くて上がらない。
肉に沈む刃が骨に触れようとしたところで、もうひとつの声がした。
「引き上げるぞ、キルマンティス」
「だがムカデリンガー、こいつを今始末しておけば」
「その傷では暫く動けんだろう。たっぷりと地獄を見せてやりゃあいい。それよりこいつの仲間が嗅ぎつけてきたら、作戦がおじゃんだ。急げ」
「判った」
刃が引き上げる。
フリオは頬が冷たい床に落ちるのを感じた。
体に力が入らない。
「……ぁ……」
喘ぐ。
吸った空気が全部胸の傷から洩れていくようだった。
目の前に、血に濡れた手が握る写真があった。角度で写真の中が見えない。
頼む、少しその手をずらして僕にも見せてくれ。もう一度、その中に僕の家族が見えないか確かめてみたいんだ。
ああ、でも、こう暗いんじゃ、もう見えない。
狂ったように遠くで薬缶が鳴っている。
止めなくては。
止めなくては……

——Quiero volver.

片霧大作はその日、不機嫌だった。
年も明け、はや一月も下旬。いい加減、実家に顔を出さないといけない。
できることなら顔など出したくない。出したその横っ面をぶん殴られて説教が始まるのがオチだ。
志の全く違う父親・片霧大鉄とは一時は和解したものの、ジャマールを倒してもまだ地球を守ってる息子に業を煮やしたらしく、やはり隙あらば家業を告げと言われ続けるまま五年。もう二十八にもなろうというのに、未だに親の所有物のように扱われては参ってしまう。
里帰りしている旧友と会うとか、ビーファイターの後輩であるフリオ・リベラが企画した古代アンデス文明展を観に行くとか理由を並べ立てて日数を稼いでいたのだが、いよいよもって言い訳も尽きてきた。
「ほおらーっ、大作！　シャキっと歩く！」
能天気に同じビーファイターである仲間・鷹取舞が大作の腕を引く。
大鉄が舞も泊まって行きなさいと誘ったのだった。何を考えているのだあの親父は、と大作は口の中でぼやく。大鉄は舞を気に入っているらしい。それにしたって泊まって行けはないだろうと思ったがこの女は女で「行く行くー！　わーい」などと抜かしやがった。いいのか年頃の娘が。
駅が近付いてくる。
ああ行きたくない。
踏切を渡ろうとしたとき、舞の携帯電話が鳴った。
「はい。……え、メルザード？」
電話に応じた舞の顔色が変わる。
いいタイミングで攻撃してきやがった、メルザードさん。大作は密かに胸を撫で下ろす。あの親父の説教に較べたら、超古代の怪物

の方がまだ可愛いものだ。
しかし直後に、それよりも怖るべき事態を大作は耳にすることになる。

45．5話　「テオブロマ」（4）

白い空間にフリオはいた。
羽ばたきの音がして顔を上げると、大きな鳥が翼を広げている。
逆光で黒く、鳥は嗄れた声で鳴いた。

――?Quieres volver?

フリオは頷く。

――Quiero volver.

鳥はフリオの頭上を一度旋回して、長い首を振った。

――No tienes la calificaci?n venidera conmigo.

言って、鳥は翼をはためかせた。
弧を描いて鳥の姿が小さく去ってゆく。
フリオはその後を追った。

――Espera.
――Vuelvo.
――Quiero volver.
――?Quiero volver!

そのとき、不意に近く耳元に声がした。
鳥のそれとは違う。水底に沈む錨のような声だった。

――Ｎｅｃｉｏ.
――Ｒｅｇｒｅｓａ.

「あ。寝言、止まった」
甲平が呑気な声で言った。
大作は顔を上げ、腕を組む。
薄暗い蛍光灯。リノリウムの淡い緑の床の上には、申し訳程度にスポンジの入った座面が乗っかった、パイプの丸椅子。白い壁、淡いクリーム色のカーテンと扉。部屋の中央に白いベッドと緩慢な点滴の雫。
そして眠るフリオの姿があった。
肩から胸にかけて褐色の膚を白く包帯が覆い、いかにも痛々しい。
窓は夜を映してすっかり鏡になってしまった。病院はもうそろそろ夕食の時間だ。薬と消毒と、それからよく判らないものが入り混じった匂いで、夕餉の匂いは全然食欲をそそらない。
大作の隣では舞が気遣わしげにフリオの横顔を見守っている。健吾や蘭も甲平の横で丸椅子に落ち着かない様子で座って様子を見ていた。
そこへ小山内博士が入ってきた。
「先生から話を聞いてきたよ」
「どうなんですか、フリオの容態は」健吾が尋ねる。
厳粛な顔で小山内は答えた。
「もう二度とウィンブルドンのコートは踏めないようだ」
「そういうボケはいいから」甲平が小山内を睨む。
大作は組んでいた腕を解いた。「その様子だと、大丈夫みたいですね」
「ああ」小山内は頷く。「傷が深く、出血は酷かったものの、命に別状はない。神経や筋にも影響はないようだよ」
と。

「フリオ」舞が声を上げる。
一同がベッドに視線を注ぐ。フリオの瞼が開いていた。
異国の黒曜石の眼が半ば眠たげにゆっくりと覚醒し、周囲を見回す。
「良かった！」安堵の呈で微笑んだのは甲平だ。「なんか寝言言ってたから、起こしたほうがいいのか迷ってたんだよ」
なにが起きたのかまだ理解できていないらしい。憔悴したさまでフリオは無謀にも身を起こそうとした。
顔が歪む。
「……っ」
「寝てろ」大作はフリオの肩をシーツへ押し戻す。
多少荒っぽいが、これぐらいやってやらないとこいつは判らないだろう。苦しげな息遣いに平然と気付かないふりをして、大作は自分が怒っているのに気付いた。
己を静めるつもりで一歩離れ、窓際に立つ。
入れ代わりに蘭がベッドへ身を乗り出した。
「大変だったわね。一体、あそこでなにがあったの」
「蘭」健吾が蘭の肩を引き戻す。「今は無理だ」
「なにが……」
力のない声。
フリオは朦朧とした様子で鸚鵡返す。
次第に記憶が覚醒してゆくようで、表情を強張らせ始めた。手探りの言葉が連なる。
「……小山内博士に……紹介してもらって……」眼を伏せる。「行ったら……皆、倒れてて……後ろから、キルマンティスが」
「うん。判った。もういいよ」舞が頷いて見せた。
「済まなかったね」
小山内が申し訳無さそうに頭を垂れる。「私が余計なことをしたばかりに、とんでもないところへ居合わせてしまって」
フリオは小さく首を振る。引き攣れて、肩の傷に響いたらしく、

わずかに眉を寄せた。
「僕以外の、誰か、生きてましたか」
「……」
舞は困惑の表情を浮かべて大作を振り返った。
大作はただ、首を横に振った。
フリオの瞳が哀調の色に曇る。か細い声が唇から洩れた。
「……僕の所為」
「なに言ってんだよ。フリオの所為なわけないじゃんか」
甲平が聞きとがめて無理矢理に笑い飛ばす。
「そうよ。手遅れだったんだもの、その状況じゃ仕方がなかったわよ」と蘭が応じ、健吾も頷く。「気に病んじゃ駄目だ」
だが、フリオの耳には届かない様子で、横たわる声が繰り返す。
「僕の所為だ」
暗く昏い瞳に光はなかった。意識を失う直前の記憶だけが映っているのだろう。
「もう行くぞ、お前ら」
大作は顔を上げて他の四人を睨んだ。「怪我人取り囲んでる場合じゃねえよ」
言いながら大作はベッドを迂回して足早に扉へ向かう。
四人も顔を見合わせて、仕方ないといった表情で口々に励ましの言葉を作りながら扉へ向かう。
「ゆっくり休めよ、フリオ」
「お大事にね」
背後で静かに扉が閉まる。
大作は肩越しに少し振り返り、エレベーターホールへと歩を進めた。

メルザードの長・皇祖女帝マザーメルザードの白い巨体が闇に浮かび上がる。

紅い双眸が見下ろす先には三体の悪の昆虫戦士が、洗った骨のようなマザーの体色に色を添えるように跪いている。
変幻鎧将ビーザック。
魔剣鎧将キルマンティス。
冷血鎧将ムカデリンガー。
例によって猛毒鎧将デスコーピオンの姿はない。
「我らビークラッシャー、マザーにこの化石を献上したく、人間どもの手から奪い取ってまいりました」
キルマンティスが黒い布の包みを捧げ持つ。
傍らで見ていた恐竜武人ライジャが角を逸らして鼻白む。
「化石だと、今更何を下らぬことを。マザーは今や闇の意志により戦士を生み出せることを忘れたか」
「そうだな。我らの行為など下らぬ。――これが、ただの化石なれば」
殊勝な口調を装ってキルマンティスは包みを開いた。
マザーが目を見開く。「これは」
闇の中でも判るほどに化石は赤黒く濡れ、今も乾かずに滴っている。明るければ、黒と見えた布も濡れそぼつことで色を保っているのが判る筈だ。
「人間の血、人間の恨みが染み渡った化石にございます」
「これまでマザーのお力により、化石に込められし絶滅種の恨みを、怪人は抱いて生まれて参りました。より強い恨みはより強い力へ」
ビーザックが恭しく申し立てる。「化石の恨みに、人間どもの恨みが込められたとき、如何なる怪人が生まれ出ずるか、ご覧になりたくはありませぬか」
「人間どもが、人間の恨みで滅びると申すか」
マザーは満足げに頷いた。「よかろう。闇の意志と絶滅種の恨みに、人間の恨みが合わされば如何なる力か、試してみようぞ」
闇に哄笑と、滴りの音が響いた。

４５．５話　「テオブロマ」（４）（後書き）

フリオの祖国って本編中では明言されてないんですよね……。中の人が近年、さっくりとインタビューでどこの国だか仰ってましたし、その国の言葉が本編での「Ｈｏｌａ（オラ）」という挨拶の言語と一致しますので、その国の公用語であるスペイン語を、拙作では使用しています。

ネット上の翻訳ソフトに頼りきりですので、おかしい点もあるとは思います、その場合はご指摘いただけると助かります……と言いつつ、まだ訳は秘密です～。

しかしとりあえずはちゃんと表示されるかどうか。

45．5話　「テオブロマ」（5）

安い再生紙でざっくりと包んだような空だった。
全体に鉛がかった白が覆い、雲の薄いところだけが灰明るい。
モノクロームの様相を示した冬の世界に、青いビニールシートと立入禁止の黄色いテープのコントラストが目に眩しい。通行人も立てた襟に顔を埋めて日々の暮らしに追われ通り過ぎ、風に負けずに電線に連なる渡り鴉だけが現場を見下ろしている。
珍しく袖を通した黒いロングコートの裾が、鴉とお揃いに風で揺れた。黒のコートは仲間である甲斐拓也に因縁のある人物を連想させるのであまり好まないのだが、今日は仕方がない。
大作は黒いリボンをかけた花束をテープの下へ置いた。土に貼り付くようにして雑草が丸く葉を広げている。ここにはもうとっくに花があった、と大作は独り言つ。学術的には「花」と分類されないが、冬の間、丸く低く地面にへばりつく葉は、薔薇に喩えられてロゼットと呼ばれる。緑色でおよそあでやかさとは無縁の、地表で見過ごされる幾輪もの薔薇はけなげに春を待っていた。
この傍らを、つい先日まで何気なく行き交いながら、過去からもたらされる石の記憶をひとかけらでも多く呼び戻そう、読み解こうとしていた人達がいた。
雑草を、そして下の土を撫でる。ざらついて土は指に地面の冷たさを伝えた。青いビニールシートに覆われて見えない地面に、脳裏で人のかたちを描く。
凍てついた地面に、体温を奪われていった人達へ思いを重ね合わせるように、目を閉じる。
と、不意に背中の中央に硬いものが押し当てられた。
「手を上げろ」
物騒な言葉に似つかわしくない、笑みを含んだ可愛らしい声。
大作は素直に手を上げた。

背中から感触が離れ、手に当たる。
黒いダウンに身を包んだ舞が、温かい缶コーヒーを差し出していた。
「サンキュ」
受け取って、握りながら立ち上がる。指先の毛細血管がじんわりと開いていく。
「教えてもらってきたよ」
舞はポケットから缶のミルクティを出して開けた。湯気が一筋流れて空気に溶けた。
「死者八名、負傷者一名。これはフリオね」
「司法解剖はしないんだろ、今回は」言いながら、大作も缶コーヒーを開けて一口啜る。
「うん。死因がはっきりしてるから、昨日のうちに遺体は全部遺族が引き取って、大概どこも今日がお通夜、明日がお葬式みたい」
もう片方のポケットから折り畳まれた紙を出してみせる。「住所と名前も、小山内博士が知り合いの大学教授さんから聞いてくれた」
「仕事早いな」
「当然」
舞は少し微笑む。小さな唇から息が白くふわりと広がった。
どこかもの寂しげな横顔だった。
出会った頃はまだ十九歳の、明るく勢いだけはやたら強い少女だった。
五年を経て、成人して久しいとはいえ生来の基本的な性格が変わったわけではない。けれど、憂いを覚える程度には、時は平等に経験を与える――今回も。
「俺一人で行くよ」大作は紙を受け取ろうと手を差し伸べた。
舞は首を振って紙を遠ざける。「あたしも行く」
「お前はフリオを見といてくれ」
「健吾達が交代で様子を見てるよ」舞は少し笑う。「放っておいたら、いなくなっちゃいそうだもんね。三週間ぐらい」

「本人がいないから言えるネタだな」
大作も笑みを作って応じた。「フリオの様子は？」
舞は首を振る。
「抜け殻だって」
「そうか。まあ、今はそんなもんだろうな」
大作は缶コーヒーを呷った。もう冷め始めていた。
「ちょっと話を戻すけど」
「ん？」
舞はやや表情を険しくして、現場のプレハブを指差した。「盗まれてたんだって、化石」
「化石だけか」
「うん。もろふた、って判る？」
「餅つきのとき、餅並べといたりするやつだろ、こう、平たくて蓋がない箱っつーか」
「そう。その、もろふたみたいなプラスチックの箱に化石を並べて置いてあったらしいんだけど、大きい化石があったらしいところだけ、血が飛んでた跡がなくて判ったって」
「典型的だな」
「メルザードが偽装工作でもないだろうしね。でも、一体なにを企んでるんだろ」
と。
ポケットから警戒音が鳴り響く。
大作は甲虫型の変身アイテム兼通信機であるビーコマンダーを取り出す。
どこか場違いな、妙に明るい声が流れてきた。
『メルザードが現れたよ！』
コスモアカデミアのコンピューターの中にいる人工生命体ビットの声だ。
『U地区で暴れてる』
「噂をすれば、だな」大作と舞は顔を見合わせた。

「行こう」
「うん。……いや」大作は一度頷いたものの、やや眉を寄せる。「嫌な予感がする。悪い、先に行っててくれ」

色のない空に、鮮やかなタンジェリンオレンジ色の羽根をした鳥が翼を広げ、ビルの合間を飛んでゆく。顔と羽根の先は黒緑で、鮮やかなコントラストだ。
よく見れば異様な、ただの鳥でないことが判るだろう。体長が大柄な成人男性の一回りほども大きく、翼のほかに黒く長く鋭い鉤爪が光る両手両足を持っている。
嘴だけは小さくちょこなんと顔の上に乗っかっていて一見愛嬌があるが、夜鷹のように口は顔の半分ほども開いて耳をつんざくような声を上げる。
しかし、ゆっくり落ち着いて姿をよく見ることはできようもない。
羽ばたくと同時にタンジェリンの羽が降って来る。
羽の根元は、もはや串と呼びたい程に鋭く凶悪な針状で、地上から見上げるしかない人々に容赦なく降り注いだ。羽が刺さった人々は次々と咳き込み、もがき苦しんでその場に倒れ伏してゆく。
悲鳴が地に満ちる。
その様子をビルの屋上で眺める青と黄色の昆虫の影があった。
「……やっぱり俺達の言うこと聞かないな、あいつ」
ビーザックがぼやく。「もっとこう、国会議事堂とか変電所とか襲わせようと思ったんだが」
「まあマザーが闇の意志まで入れちまったからな。あの無軌道さはマザーの所為だろ。本人には言えないけど」
ムカデリンガーが頷く。
「でも巧い具合に被害は出てるし、この騒ぎに乗じてなにかひとつ」
「なにか、って？」
ビーザックとムカデリンガーが振り返る。

甲平、健吾、蘭、舞の四人が並んで屋上のドアを開けていた。

45．5話　「テオブロマ」（6）

「ビークラッシャー！　貴様らの企みもこれまでだ！」
甲平が啖呵を切る。
舞は昆虫型の変身用デバイス・ビーコマンダーを構えた。「重甲！」
ビーコマンダーの黒い羽状の蓋が左右に開き、内蔵された強化服・インセクトアーマーが舞の身を包み赤い雌甲虫の姿を模した昆虫戦士・レッドルへと変える。
他三人も昆虫型の変身用デバイス・コマンドボイサーを構え、インプットカードを挿入する。「超重甲！」
甲平の姿は金色の甲虫の姿を模した昆虫戦士・ビーファイターカブトへ。
健吾の姿は銀色の鍬形虫の姿を模した昆虫戦士・ビーファイタークワガーへ。
蘭の姿は紫色の天道虫の姿を模した昆虫戦士・ビーファイターテントウへと強化服・ネオインセクトアーマーを装着してゆく。
「来やがったか、ビーファイター。いいところで」ビーザックが吐き捨てた。
「俺達の相手なんぞしててていいのかな」
ムカデリンガーは悠然と腕を振る。
「あの闇の石鳥獣ピトモルテスの羽根には毒がある。今頃人間どもがばたばた死んでいくところだ」
「なんだって！」
「貴様ら人間がせっせと掘った化石から造った怪人の手で死ねるんだ、ありがたいと思え」
「お前らが来たからには、俺達も後はピトモルテスに任せて高みの見物と行こう。ま、精々頑張ることだ」
言ってビーザックとムカデリンガーの姿は掻き消えた。

三人はビルの縁に駆け寄った。
地面でのたうち回る人々の姿を目の当たりにし、顔を上げる。
「大変！」テントウが叫ぶ。
「急ごう」
三人はビルを降りるべく駆け出した。

大作は病棟の廊下を進んでいた。
フリオの病室の扉の前に立つ。
と、手をかける前に開いた。
今まさに飛び出していこうとしている部屋の主とぶつかりそうになる。
「おっと、自動ドア」
「大作」フリオが目を丸くする。
手には革ジャンを掴んでいる。いつもの複雑な模様が織り込まれたシャツを羽織り、大きく開いた襟刳りから白い包帯がわずかに覗く。
「やっぱりな」
大作は扉に手をかけて通れないようにする。「そんなこったろうと思ったよ」
「大作。僕、行かなくては」
「何故だ」
「あの怪人、きっと、奪われた化石から出来てる。化石奪われた、僕の所為。だから」
筒抜けかよ。
大作は首を振った。「何故だ」
「大作」焦った表情がこちらを見上げる。
「いいから答えろ。何・故・だ」
フリオを睨む。
眼力には自信がある。「言ってみろ。何故、お前の所為なのか」

「……間に合わなかった」
フリオは俯く。「あのとき、もっと早く行こうと思えば、できた。でも、僕、途中で立ち止まった」
「――」
「もっと早く、発掘現場に辿り着いていれば」
「調査隊を助けられたかもしれないのに、か？」
「――……」
逡巡しながらフリオが頷く。
「お前が考えてんのは、違うだろ」
大作は俯いたフリオの目を見る。
伏目がちに床に視線を落とした一重と二重の瞼。
「実際はこうだ。もっと早く、発掘現場に辿り着いていれば身代わりになれたかもしれないのに――違うか？」
「？Ｔｅｎ？ａ　ｕｎａ　ｆｏｔｏｇｒａｆ？ａ！」
フリオが叫ぶ。
血を吐くような声だった。
「Ｕｎａ　ｆｏｔｏｇｒａｆ？ａ」大作は繰り返す。「写真？」
「……建物の中で倒れてた人。写真、握ってた。写ってたのは、たぶん、奥さんと子供」
目の前で、肩が震える。
革ジャンを握った拳が白くなっている。「写っているのが、一瞬、僕の家族に見えた。……勿論、見間違い」
声が揺れる。
「大作。僕は、喜んだんだ」
「フリオ」
揺れる。
「写真に写ってるのが僕の家族じゃなくて、ほっとしたんだ……！」
革ジャンを握り締めたまま、左の拳が壁を殴った。
壁を抉る空しい努力をしながら、左手は何処へも進めずに留まっている。

大作は指を擦る。先刻触った土はもう乾き落ち、残っていなかった。
古代インカの神々は、地球の裏側にいる民にまでは手が廻らないものか。それともコンキスタドールに蹂躙されつくして、この民が自ら嵌める軛を外す手伝いを出来るほどの力は残っていないのか。
当てにならない神頼みは無力だ。今の自分と同じくらいに。
大作はひとつ溜息をついて、口を開こうとした。
その瞬間。
凶暴な音が部屋全体を揺るがせた。
顔を上げた瞬間に、部屋の奥、窓の外をタンジェリンの飛行物体が横切る。
「くっそ！」
大作はフリオを跳ね除けるようにして窓へ駆け、開けるが早いか飛び降りた。
「重甲！」
地面に叩きつけられるよりも早くポケットの中のビーコマンダーのスイッチを入れ、全身を緑色の鍬形を模すインセクトアーマーが覆う。
着地して空を見上げ、飛び去るタンジェリンの翼の方へ駆け出した。
凶鳥が再び甲高い鳴声を上げる。
フリオは目を見開いて、窓の外を見た。「……！」

４５．５話　「テオブロマ」（６）（後書き）

大作はスペイン語がある程度は判るという設定です。
「大作なのに（失礼）高スペックすぎ！」と思われそうですが、コスモアカデミアヨーロッパ支部の派遣員なのは本編公式ですから、あながちありえない話ではないと思うのですよ。ラテン語ができれば、ヨーロッパの言葉はラテン語から派生してるからどの国の言葉も大体把握し易いとも聞いたことがあります。
まあ、彼のことだから大いにボディランゲージを有効利用しているとも思いますが。一応そういうことでひとつお願いします。

45．5話　「テオブロマ」（7）

高層ビルの立ち並ぶオフィス街。
携帯電話を片手に忙しなく擦れ違う仕事中の雑踏で忙しない街は今や機能を止め、累々と横たわってもがき苦しむ人々で埋め尽くされている。
頭上でピトモルテスが金切り声を上げた。
「うわっ……！」
声にはなにか背中を怖気させるものがあり、咄嗟にレッドルは足を竦ませた。同様に感じたらしく、カブト、クワガー、テントウの動きも止まった。
その隙に巨大な翼が羽ばたいた。
鋭い羽が降ってくる。
「！」
四人は咄嗟に腕で身を庇う。
身体の上で金属が跳ねる音がした。幸い、ネオインセクトアーマーの装甲を貫くほどの力はないようだ。
「飛んでるのをどうにかしないと」クワガーが見上げる。
「テントウ、ジャイロで空から攻撃して」
レッドルはテントウを振り返る。テントウが頷いた。「判った。地上からの追跡はお願い」
「よっしゃ、行くか！」カブトが拳を握る。
「俺は街の皆を避難させる」クワガーが言って、倒れた人々の方へ駆け出した。「後は頼むぞ、カブト」
「レッドル先輩もいるし、任せとけって」カブトが胸を叩いた。
テントウは腕を上げた。「ステルスジャイロ！」
間もなくビートルベースからテントウムシ型ジャイロプレーンが飛来し、テントウは搭乗する。
そこへ緑色の鍬形を模すインセクトアーマーが駆けて来た。

「皆！」
「ジースタッグ」
レッドルは声を上げる。
レッドルとジースタッグはコスモアカデミアが前身のアースアカデミアの頃から共に戦ってきた仲間だ。コスモアカデミアに名を変えた頃から参入したカブトらを信用しないではないが、やはり心強さが違う。
「酷い有様だな」ジースタッグが辺りを見回す。
「あの鳥、ピトモルテスが毒羽を飛ばしてるの。早く追わなきゃ」
「ああ」
レッドルはカブトやジースタッグと共にタンジェリンの凶鳥を追おうと意気込む。
しかし背後からの声が、走り出そうとしていた三人の足を止めた。
「待ってくれ」
三人は振り返る。
肩を押さえ、寒空に革ジャンも着ないで握ったまま、フリオが立っていた。
「フリオ！　なんで来たんだ、無茶だよ」
カブトが進み出る。
フリオはいつものように、少し首を傾げるようにして話す。「大丈夫」
「大丈夫なわけないだろ。とにかく戻って」
カブトはなおもフリオを説得する。
無理もないだろう。眼前に立つ異国の青年には、拭い去れない憔悴と、苦痛の色を滲ませたやや荒い呼吸が垣間見える。この場に立っていることが信じられないくらいだ。
だが、必死の様相でフリオは訴える。
「聞くんだ。……あの鳥の声、とても、哀しい」
「え？」
「あの鳥……ピトモルテス？」レッドルは問い返す。

「僕、判る」フリオの左手が胸を押さえた。「あの鳥、人の心を持ってる。哀しんでいる。……帰りたがってる」
「そんな、まさか」
「聞こえるんだ」
フリオは目を閉じる。「化石を奪われた人の想いが、あの鳥の中にいる」
「確かに、奪った化石からピトモルテスを造ったって言ってた……」
レッドルは呟いて、それがフリオの言動を肯定するものとなったことに内心しまったと思った。
口から出た言葉を取り返すことはできない。フリオはもう頷いている。
「奪われた化石の傍で亡くなった人、写真を握ってた。きっと、あの鳥の中にいるのは、あの人だ。だから、写真の家族、連れて来ればきっと、彼を止められる」
「連れて来る、って」
「判るんだ。僕も、親だから」
フリオは顔を上げる。
冬空の色を瞳に映して、懇願する。「家族を思う気持ち……僕も同じ」
「フリオ」
カブトは気勢を削がれたようで、声の調子を下げる。
レッドルも同じ思いだった。
仮説ではあるが、フリオの言葉には一理ある。
そしてもし、亡くなった人の心が怪人の姿を与えられ、人々を苦しめる悪事に利用されているのなら解放してやりたい。
もう人としての生命は奪われてしまった。だからこそ尚更、人としての最期の望みを叶えてやりたい。
人を、自然を、地球を守る者として、ビーファイターの誰もがそう思うのは当然の結果だっただろう。
だがその後がいけなかった。

こともあろうに、フリオはインセクトコマンダーを出した。
「僕があの鳥を食い止める。その間に、彼の家族を探して」
「そいつは俺と坊主がやる」
ジースタッグが一歩、フリオへと詰め寄った。「写真の家族はフリオ、お前と舞とで探して来い」
声が尖っている。
固唾を呑んでレッドルは成り行きを見守った。
「けど」
フリオは頑なに首を振る。「あの鳥、暴れる原因を作ったのは僕、だから僕が――」
言い終わる前にジースタッグの手がフリオの襟首を掴み、緑色のヘルメットへ引き寄せる。
フリオは苦しげに顔を歪めた。
「いい加減にしろよ」
低い声が囁く。
「俺はお前を止めねえ。慰めもしねえ。お前の所為じゃないなんて言いやしねえ」
フリオが瞠目する。
「お前の気が済むまで好きなだけ自分責めろ。苦しんで、悲しんで、泣いてやれ。それぐらいしか、死者にしてやれることなんて俺達にはねえんだ」
「……」
「――けどよ。気が済んだら、それからでいい、少しは思い出してやってくれよ。親だからってんなら」
模様を織り込まれたシャツを掴んだままの緑色の手がぎりぎりと軋む。
咆哮が響く。
「親だったら！！　親ァ待ってる者がいるってことも思い出せよ！！」
「……！」

フリオは憑物が落ちた顔で、緋色のアイレンズの向こうに大作の顔が見えるかのように、ジースタッグの顔を覗き込んでいた。
レッドルは進み出て、フリオの襟首を掴むジースタッグの手に、己の手をそっと重ねる。
ジースタッグは我に返ったように手を離した。
「重甲解除」
レッドルは重甲を解除した。鷹取舞の姿に戻る。
「フリオ、それ貸して」握ったままの革ジャンに手を差し伸べる。
「え」
「自分じゃ着れないんでしょ、肩が痛くて」
「――」
「着ないと、連れて行かないわよ。風邪までひいたらどうするの」
図星だったらしい。おずおずとフリオは革ジャンを差し出す。
舞は革ジャンを受け取ると、背伸びして背後に廻って、袖を通してやる。フリオは小柄な舞のために長い足の膝を少し曲げて、おっかなびっくり右腕を袖に通した。
「これでよしっと」
「舞、フリオ。頼んだぞ」
ジースタッグが言うと、カブトも頷いた。
「そうそう。俺達が勝てるかどうかは、その家族が来てくれるかにかかってるんだ。なー先輩」
「だな」
「行こう、フリオ」
舞もフリオを見上げた。
フリオは三人の顔を順番に見て、しっかりと頷いた。「判った、行ってくる。……Ｇｒａｃｉａｓ」
「Ｄｅ　ｎａｄａ」
手を振って、ジースタッグとカブトが背を向ける。
舞とフリオも踵を返し、ピトモルテスの去ったのとは逆方向に、駆け出した。

45．5話　「テオブロマ」（8）

上空をテントウムシ型ジャイロプレーン・ステルスジャイロが翔ける。
マッハ三．八の最高速度を舐めるなと言わんばかりに、程なくピトモルテスを射程距離に納めた。
ピトモルテスの変則的な滑空と、狙うにはあまり大きくないサイズのためになかなか巧く照準は定まらない。
テントウはボタンを押した。
「ステルスブラスター！」
二門の砲口から赤い光の弾丸が放たれる。
どうにか羽根を掠め、ピトモルテスが失速しながら高度を落とす。
「逃がさないわよ！」
更に攻撃しようとしたとき、機体に衝撃が走り大きく揺れた。
ジャイロの周辺で火花が上がる。
「！」
モニタが、複数の物体を捉えていた。芋虫型の敵の戦闘機フライギドーバだ。こちらにビームを浴びせながら次々と飛んで来る。
「カブト、ジースタッグ、後はお願い！」
テントウはフライギドーバに応戦すべくステルスジャイロを旋回させた。

窓の外の空が、鉛色になり始めている。
アスファルトも鉛色。タクシーの外装は爽やかな青だが、乗ってしまえば判らない。
フリオはタクシーの後部座席に舞と並んで坐り、亡くなった発掘調査隊のメンバーの自宅へと急いでいた。
舞が携帯電話で小山内博士に確認の電話をかけていた。電話を切

って、顔を上げる。
「プレハブで亡くなってた人、判ったよ」
折り畳んだ紙をポケットから出して広げる。「この、上から六番目の村里伸一さんって人だって」
「え、これ」フリオは紙をしげしげと見る。
「亡くなった人全員の、住所と名前」
舞は少し微笑んで見せた。
「あたしと大作、今日、この人達の家に謝って廻ろうとしてたの」
大作と舞が普段と様子の違う黒い服を着ていた理由が判った。
しかし余計に疑問が生じる。フリオは驚きと怪訝で、思わず瞬きを繰り返した。
「どうして、大作と舞が。それ、僕がやらなければならないことです」
舞は首を左右に振る。
「……今回のこと、あたし達の所為でもあるの」
「え……？」
「ごめんね、フリオ。あたし達、あの日、道でフリオのこと、見かけたんだ」
舞はこちらを――いや、横顔越しに窓の外を流れる景色を見ている。「でも、急いでたから声かけなかった。……もし、声をかけてたら、フリオは怪我せずに済んだかもしれない。あたし達と一緒なら、調査隊の人達も助けられたかも知れない。ううん、もしあのときあたし達が、発掘現場が襲われているのを知って先に行くことができてたら――」
「そんな」
今度はフリオが首を左右に振る。「無理だ、そんなの。誰も知らなかった。他のことも、仕方がないこと」
「ん。そうかもね。まあ謝罪はやりすぎでも、お焼香ぐらいしときたかったの。でもね、フリオが自分の所為だっていうなら、やっぱり、あたし達の所為ってことにもなっちゃうんだよ」

「――」
「ああ、違うの。誰の所為って考えるなとか、そういうことじゃなくて――」
舞は言葉を探すように、タクシーの天井を見上げる。「少しずつのなんでもない選択や行動が積み重なって、いろいろ予想も着かない結果になっちゃうもんなんだよね。どれが欠けても、大きく変わったり、逆にどうしたって同じ結果になったり……運命って言うか、さ。そもそもあの場所を発掘してたからこんなことに、とか。細かいことを一つ一つ責めてたら、最初になにを責めてたのか忘れちゃうぐらい」
ゆっくりと、小動物のような顔で微笑む。
「どうしたって気に病んじゃうよね。でもその、気にしてることは、運命を造ってるいろんな要素のたった一つに過ぎないんだってことを、知っておいたって悪くないと思う」
「――」
「それに仲間が一緒にいるのも、その仲間も同じように自分の所為だと思ってるのも、選んだ運命だからさ。背負うなら、皆で一緒に背負うよ」
少しだけ、重荷が軽くなった気がした。
それは消えたわけではないし、消えるはずもない。
けれど、支えているのは独りではなかった。
「それにしても」
舞が口調を改める。「大作ってお父さんのこと、あんな風に思ってたんだなあ～。後で教えてあげなくちゃ」
うふふ、と悪戯っぽくほくそ笑む。
「お父さん？」
「大作のお父さんの大鉄さんはね、漁師さんなの。でもね、大作はカナヅチで、跡を継ぎたくなくて家出して樹木医になったんだよ」
「大作がカナヅチ！？」
「あ、一応今は泳げるんだよ。色々あってさ、いちおう五年前に和

解してるの。やっぱり時々喧嘩してるみたいだけど」
タクシーの揺れが、舞の髪を揺らす。
「でも大作にも、お父さんと仲が良くて、お父さんが世界の中心だった時代は、あったんだよね。――遠い、自分は泳げない危険な海に、お父さんが漁に出て。寂しくて、不安で胸を一杯にして、お父さんが帰ってくるのを待ってたんだよ。きっと」
見たこともない幼少期の大作が脳裏に描かれる。
時計の秒針が進む音と潮騒だけが満たす部屋の片隅で、膝を抱えている小さな子。
「そうか、だから」

――親ァ待ってる者がいるってことも思い出せよ。

「子供だよね～、あの図体で」
舞は笑って人差し指を唇の前に立てた。「こんなこと言ってたって、大作には内緒ね」
「うん、内緒」
頷いて、フリオは微笑んだ。
口角が持ち上がるのは、随分久しぶりだった。

45．5話　「テオブロマ」（9）

失速したピトモルテスは市街地に降り立った。
羽根の一部を焦がし、飛行能力は失ったらしい。しかし勢いが削がれることはなく、黒い鉤爪の足で疾駆を始める。
逃げ惑う邪魔な人間を鉤爪で薙ぎ払い、ときには羽根を広げて毒羽を飛ばして突き進んでゆく。
その迷走たるや何処へ進んでいるのか検討もつかない。ただひたすらに、進むということだけがピトモルテスを突き動かしているかのようだった。
「あいつも自分で何処へ行けばいいのか判ってないんだろうな」
誰に言うともなくジースタッグは呟いた。
カブトは走りながら、カードによって弾種が選択できるインプットカードガンを構える。
しかしすぐに銃口を虚空に上げた。「駄目だ、狙いが定まらない、こんな人の多いところで撃ったら危ないし」
「どっか広くて人がいないところはねえのかよ」
「この先の河川敷がグラウンドになってる！」
「誘い込むぞ」
「よっしゃ！」
カブトはインプットカードガンに、インプットカードを装填して引鉄を引く。
「ジャミングビーム！」
撹乱はできるが殺傷能力のない超音波に、一瞬ピトモルテスがよろめき、振り返る。
「こっちだぜ、小鳥ちゃん」
ジースタッグが手を振る。
凶鳥は大きく口を開けて一声鳴く。インセクトアーマーが一瞬びりびりと振動した。

河川敷に向かってジースタッグとカブトが走り出した。
燃えるタンジェリンの姿が、二人を追いかけた。

病院には次々と毒羽の被害者が運び込まれた。
喘ぎ、苦悶する患者が看護師の手によりストレッチャーで搬送されていくのを見送りながら、小山内博士が医者に尋ねる。
「状況は如何なものでしょうか」
医者は苦渋の表情で答える。「今のところなんとか対応できておりますが、これ以上被害が拡大すれば手が廻りません。受け入れ不可能ということも」
「他の病院にも現在、コスモアカデミアの方から患者の受け入れ要請を要請しております」
「お願いします」
「この毒については、どう対応すれば。解毒剤や血清が必要とか」
小山内の問いに、医者は首を左右に振る。「呼吸困難、心不全など、症状からみて神経毒の一種です。即効性のある解毒剤は存在しません。また、抗血清も、なにぶん前例のない動物のものですので」
「そうですか……」
「ただ、即死する類のものではありませんし、対処法はあります。手遅れにならないうちに対処できれば、死亡率も下がります」
「ありがとうございます。宜しくお願いします」
小山内は一礼し、慌しいその場を後にした。

白い菊の花輪と鯨幕が、目的地は此処だ、と告げていた。
舞は鳩尾の奥が重くなるのを感じた。戦いに赴くのとはまた別の勇気が要る。
目をやるとフリオの表情も強張っている。
ここで怖気づくわけにはいかない。舞はタクシーの運転手に待っ

ていて貰えるよう告げ、意を決して降りた。フリオも後に続く。
線香の匂いが鼻をついた。
と。
「帰りなさい！」
怒号が響き渡って、舞は一瞬首を竦める。
咄嗟に、自分に言われたのかと思った。調査員の死を招いた咎で門前払いを食うのだ、と。
しかし声のほうを見ると、玄関から逃げるようにして喪服の女性が出てきた。男の子の手を引いている。斜めがけにしている青いポーチと紺の制服からして、幼稚園の年少さんらしい。
そりゃあそうか、と舞は思い直す。重甲前の自分を見て、ビーファイターだと判ろうはずもない。よしんば顔を知られていたとしても、事件に関係していたことは知らないはずだ。
ということは、これはもしかしてとんだ修羅場に居合わせたのでは。
「あなたはもう村里家の嫁じゃないんだから、ここにいる資格はありません、帰って！」
「すみません、でも」
追い出された女性が玄関を振り返って弁明しようとするが、初老の、黒い紋付の着物の女性が凄い剣幕で出てきた。
「でもじゃないわ、この泥棒猫！」
うわあ。
昼ドラ以外で泥棒猫って初めて聞いちゃった。
省みると、フリオも呆気に取られている。なんというか、日本のわけの判らない部分を見せてしまった気がする。
初老の女性は泣き叫ぶようにきいきいとがなり立てた。
「跡取り息子の親権をちゃっかり奪っておいてよくものこのこと敷居を跨げたものね、あなたに焼香なんかされたら伸一が浮かばれないわ」
「……失礼します」

追い出された女性は子供の手を引いた。「行こう、一明」
一明と呼ばれた男の子は状況がよく判らない様子だ。
「おとさんいないの？」
「いないって。帰ろう」
「舞。あの親子」フリオが舞の肩を突付く。「あの人が持ってた、写真の家族」
「！」
舞は進み出て、女性を呼び止めた。「待ってください！」

グラウンドに駆け込むと悲鳴が上がった。
同じエプロン姿の女性が二〜三人、そして数十人の幼稚園児。
ドッヂボールでもしていたのだろう、キャラクターが描かれたビニールの、当たってもてんで痛くなさそうなボールが転がっている。
「逃げろ！」
ジースタッグは声を張り上げ、身を翻す。
追いかけてくるピトモルテスが羽根を広げようとしていた。
ジースタッグは咄嗟に体当たりを食らわせる。
その隙に、カブトが手を翳す。「フィニッシュウェポン！」
手の中に現れた矛・カブトランサーで思い切りタンジェリンの身体を殴りつけた。
ピトモルテスの黒い首がカブトの方を向いて威嚇するように甲高く鳴いた。
ジースタッグは再びインセクトアーマーが振動するのを感じた。

45．5話　「テオブロマ」（10）

ほど近い喫茶店に舞は親子を誘導した。
コーヒーの芳香と緩やかなピアノ曲が流れる喫茶店のテーブルで、舞と女性が向かい合う。
フリオは一明と向かい合って相手をしていた。クリームソーダが半分溶けかかっているのもそっちのけで、一明はポーチから電車を取り出して遊びに夢中だ。
「これねえ、せんろ」とテーブルの木目を指差す。「がたんごとん」
「一明くん、電車好きなんだ」
フリオがにこにこと同じ目線で話しかける。
「うん」
フリオを南米にいた頃から知っている大作から以前聞いた。フリオには妻子がいるそうだ。その所為もあって、フリオは子供好きなのだろう。
「これはなんていう電車？」
「よんひゃっけいつばさ」
「そっか。すごいね、詳しいんだ」
なんだか盛り上がっている。
舞は女性のほうへ向き直った。
女性は口をつけていたコーヒーカップを受け皿に置いた。
「村里とは、別れて一年になります。別れるのにも、丸一年かかりました。この子の養育権や慰謝料で揉めて」
「そうだったんですか」
「村里の魂が怪物に宿っているっていう話は……正直、信じられません」
「ですよね。あたしも、正直百パーセントは信じてません。けど、可能性があるなら賭けてみたいんです」
舞は一所懸命女性に語りかける。「別れてしまったからこそ、村

里さんはきっと、あなた達のところへ帰りたかったんじゃないか……そんな気がするんです。お願いです、あなた達の安全は私達がお守りします、一緒に来て貰えませんか」
「私は帰りたくないんです。あの頃になんか」
女性は吐き出すように言った。「怪物だからっていうんじゃなくて、怪物が私達と出会って、あの人に戻るかもしれないから、尚更、会いたくないんです。すみません」
これは重症だ。
舞は顔色を伺うように、上目遣いに彼女を見た。
「あの。立ち入ったことをお伺いしますが、どうして別れたんですか」
女性は薄く嗤った。
「いい人でした。酒とか借金とか、暴力とか、そういうことは全然なかったんです。でも」
疲れたような凍ったような笑みだった。「あの人。一度も、私の味方をしてくれたことはなかった」
完全に駄目だ。
舞は望みがないのを悟る。言葉を失っていると、女性はハンドバッグを手にした。
「もういいですか」
「えっ、と」
「すみません、お役に立てなくて」
口調に、謝罪の形をとりながら作られた壁があった。「行くよ、一明」
「あそんでるの」一明は楽しくフリオと遊ぶのを邪魔されて不満げに顔を上げる。
「遊びはおしまい。玩具はバッグにないないして、お兄ちゃんにありがとうしなさい」
一明は渋々、電車の玩具を青いポーチに仕舞う。
しかしどう大人の話を聞いていたものか、顔を上げてフリオに尋

ねた。
「おにいちゃん、おとさんに会う？」
一瞬言葉に詰まる。
フリオは笑みを作って、頷いた。「そうだよ」
「じゃあねえ。これねえ。おとさんに。はんぶんこって、やくそくだから」
取り出したのは端を少し食べかけた板チョコレートだった。
「わたして」
一緒に暮らした頃に、この子と父親はチョコレートを分け合って食べた楽しい思い出があったのだろう。
板チョコ一枚は多過ぎるから、お父さんと半分こでないと食べちゃだめだ、約束だよ、と言い聞かせていたのかもしれない。胸が詰まった。
フリオは板チョコを受け取った。
「約束する。必ず、一明くんからってお父さんに渡す」
「うん」
「ありがとう、でしょ」女性が促すと一明はぺこりと頭を下げた。
「あいがと」
二人は喫茶店を出た。舞も伝票を握って、フリオと共にレジへ向かう。
「駄目だった」フリオは肩を落としている。
「うん。こうなったらどうにか、あたし達でできることしなきゃ」
応えつつ、舞は支払を済ませた。「領収書ください。コスモアカデミア様で」
喫茶店を出ると、心模様を映すように雲は一層低く厚く暗かった。影を色濃くした街路樹の緑がタクシーの窓に映り、待ちわびる仲間を思わせる。
舞は待たせているタクシーへと急いだ。

ピトモルテスは落ちていたボールを易々と踏み潰して、向かってきた。
鉤爪の腕が風を切って振り下ろされる。
ジースタッグは右手の、鍬形の顎を模したスティンガークローで受け止め、そのまま挟み込む。
更に攻撃すべくカブトがランサーを振りかざす。
攻撃が当たるよりも早く、遠くで爆発音が響いた。
「！」
音のほうを振り返ると、街で炎が上がっている。
芋虫型の戦車ギドーバが数体こちらへ向かいながらビームを放っていた。
「カブト！　ここは俺が食い止める、お前は街を！」
「判った！」
カブトは手を翳す。「来い、カブトロン！」
砂埃を上げてビートルベースからカブトムシ型六輪装甲車が疾駆してくる。
カブトはカブトロンに搭乗して、ギドーバの方へと向かって行った。
「さて」
ジースタッグはピトモルテスの腕をスティンガークローでで挟んだまま更にしがみつく。「お前はもうちょっと俺とここにいてもらおうか」
ピトモルテスがもがく。
「動くなよ。攻撃したくねえんだ」
ジースタッグが呟く。「……早くしてくれよ、舞、フリオ……！」
ピトモルテスはジースタッグに浴びせるように、大音響で金切り声を上げた。
びりびりとインセクトアーマーが振動する。
同時に警告音が耳に響いた。
「なに！？」

視界が急に活動限界を告げる。
次の瞬間、冷たい風が髪の上を走り――ジースタッグではなく片霧大作が、そこにいた。
「重甲が、解除された！？」
大作の狼狽の隙に、ピトモルテスは大作の腕を振り解いた。
頬を浅く鉤爪が掠める感触を覚えた、と思った次の瞬間に視界が一回転して身体が地面に叩きつけられた。
黒い鉤爪はそのまま大作の横を通り過ぎるべく歩を進めた。
大作は顔を上げ、ピトモルテスの進行方向を見て、はっと息を呑む。
逃げ遅れたと思しき幼稚園児が怯えた顔で、鉄橋の橋桁の陰からこちらを見ていた。

45．5話　「テオブロマ」（11）

一本また一本と数えられる程度に、窓に雨が線を描き始めた。走り始めたタクシーの中、フリオの隣では舞がビーコマンダーを出し、確認している。
「ビット。今、ピトモルテスはどこ？」
『河川敷のグラウンドで、ジースタッグが食い止めてるよ！』
「ジースタッグが？　カブトは」
『ギドーバが出て、そっちと交戦中！』
「大変！　急がなきゃ」
『ピトモルテスの毒羽に気をつけて！』
「判ってる」
程なくして、河川敷近くへ差し掛かる。
舞が運転手に呼びかけた。
「あたしはここで。この人は病院まで乗せてってください。運賃はコスモアカデミアに請求お願いします」
言って降りかけた舞の手を、フリオは掴んだ。
「僕も行く」
「我侭はここまで」舞は目を吊り上げた。
首を振る。「今の聴いて、帰れない。ジースタッグ、一人」
「でも……」
「ここまで我侭を通せば、もう後は一緒」
「もう」舞は苦笑した。「判った。無理しないでね」
フリオは苦笑で返し、舞と共にタクシーを降りた。
頬を微かな雨が掠めた。
インセクトコマンダーを取り出す。舞もビーコマンダーを取り出した。
「ピトモルテスの毒羽に生身で当たったら大変だから、ここから重甲していかないとね」

フリオは頷いてインプットカードを挿入した。
「超重甲！」
舞はビーコマンダーを掲げる。「重甲！」
フリオの姿は、銀の身体に赤と黒のアクセントカラーを配し、蛍を模した光の戦士――ビーファイター・ゲンジとなる。
舞の姿も赤い雌の甲虫を模した戦士・レッドルのインセクトアーマーを纏った。
そして河川敷へと駆ける。
傷が悲鳴を上げる。ネオインセクトアーマーは装着者を保護し、身体能力を補助するものではあるが、やはり体力の消耗は否めない。
それでも、河川敷の様子が視界に入った瞬間に、わずかな弱音は吹き飛んでしまった。
ジースタッグの重甲が解除され、大作は背後からピトモルテスを必死で羽交い絞めにしていた。
頬に走る爪痕から、黒いコートの襟へ血が流れ落ちている。
さらに鉄橋の下、橋桁の陰では子供が一人、足を竦ませて泣いていた。
「大作！」
レッドルが叫んで、転げ落ちんばかりの勢いで土手を駆け下りる。
ゲンジもピトモルテスへと跳んだ。
「レッドル、子供を！」
大作が叫ぶ。
「任せて！」
レッドルは子供へと駆け寄って庇う。
「うわっ」
大作の身体が振り解かれて地面に転がった。
ピトモルテスは黒い嘴を裂けんばかりに開いて、轟音を放つ。
音の振動がネオインセクトアーマーを揺らす。
ゲンジはピトモルテスの喉笛に掴みかかり、包み紙を剥くのもそこそこに、大きく虚空を開けた口に、預かってきたチョコレートを

捻じ込んだ。
「一明くんから、預かった」ゲンジは必死に呼びかける。「おとさんに渡して、半分こ、約束だ、って」
抵抗してもがいていたピトモルテスの動きが、不意に止まった。
ゲンジは手を離した。
全員が見守る。
「……カ」奇声しか発しなかった凶鳥の嘴から、言葉らしき声が洩れた。「ズ……ア、キ……？」
水面を渡って冷やされた風が、枯れた葦を鳴らして通り過ぎた。
大作が身を起こし、コートについた草の欠片を払いながら立ち上がる。
「インカの神様って、助けてくれるんだな」
チョコレートだからか。……あれ？　そうだっけ、とゲンジは首を傾げる。
しかしゲンジも、今は神に感謝したい気分だった。
ピトモルテスの黒目がちの瞳は濡れ、光が宿って見えた。
「良かったあ」
レッドルが胸を撫で下ろし、子供の手を引いた。
おずおずと橋桁の陰から子供が出てくる。
と、不意にレッドルの重甲が解けた。
「あれ、あたしも活動限界――」
その瞬間だった。
不意にピトモルテスが地面を蹴り、翼を広げた。
刹那の、信じがたい行動。
フリオはゲンジのヘルメットの奥でただ目を見開く。
障害物の殆どない、河川敷のグラウンド。
逃げ場はない。
しかしピトモルテスのこの行動を読んでいたかのように、全く同じタイミングで黒い影が躍り出た。
子供と舞の目の前。

コートを翻した唯一の障害物。
両腕を広げ、襲いかかる無数のタンジェリンオレンジを一身に受け止めた影を、蒼白を呈した舞の顔が見上げる。
「大作！」
大作はわずかに震える肩越しに、舞を見る。
「……大丈夫、か？」
舞は矢継ぎ早に繰り返し頷いた。
二人とも無傷なのを確かめ、表情が和む。張り詰めた気を緩ませたのか、ふっと長身がぐらついた。
それを下から持ち上げるようにして、黒い鉤爪の手が鋭く、コートの真中、大作の腹部を穿った。
曳き抜かれた爪から朱が矢継ぎ早に滴る。
「か、はッ」
咳き込み、身を折るようにして、膝から大作の身体が地面に頽れた。後頭部が意志のない物体として、引力に従い草の上に落ちる。
世界が、凍りついたように感じられた。
鉤爪の手から落ちる雫だけが、燃えるように朱かった。
舞は子供を庇いながら後ずさる。
追って歩を進めながらピトモルテスが腕を振り上げる。
ゲンジは――
気が付くと、鳥の横っ面を殴り飛ばしていた。
握った拳が今まで庇っていた右腕だということすら気づかなかった。
ピトモルテスがよろめいて片膝をつく。
黒緑色の羽毛で覆われた頭を、ゲンジは右手で掴む。
「どうして」
胸の中で、重く冷たい塊が膨れ上がって、声が詰まる。
真っ白になった頭の中に疑問符だけが渦巻いて、唇から零れた。
「どうして……！？」
ぎりぎりと掴み上げる指の間から黒目がちの眼を見開いて、鳥は

嘴を開いた。
「煩イ」
言葉だった。
どす黒く。
暗く昏く。
混沌と暗澹と。
澱んで濁った、人間の言葉だった。
「煩イ。邪魔ダ」
押さえ付ける手を押し返し、再び羽根を広げる。
「邪魔ダ！！　邪魔ヲスルナ！！　貴様モ死ンデイロ！！」
タンジェリンの身体が、鉤爪がゲンジへ跳びかかろうとした。
ゲンジの両腕から閃光が溢れて二人を包む。マックスフラッシャーだ。
目が眩んでピトモルテスが怯む。
「……」
ゲンジは鳥の頭に右手で触れたまま、右腕に自動的に装着されるハンドカノン砲を、ほんの数百分の一秒、待った。
「――ライトニングキャノン」
更なる閃光が鳥の頭を包んで、轟音と共に吹き飛ばした。
反動が肩の傷を強引に背後へと引き拓いてゆくのが判った。
超重甲が解除される。
哭きながら、霧雨混じりの冷たい風がフリオの頬を撫で、音もなく白い灰になってゆく化石の形を崩し、跡形もなく巻き上げてゆく。
なにも残らない。
耳の奥に暗い澱がこびりついただけだった。
その耳に涙声が飛び込んでくる。
「大作、大作」
舞が雨から大作の頭を庇うように膝に抱え、呼びかけている。「今、助けが来るから。しっかりして」
フリオは肩を押さえて近寄った。

「大作……？」
黒いコートの下のシャツが夥しい赤に染まっていた。
胸郭が上下を繰り返していることに一瞬安堵するが、微かな呼吸にざらついた喘鳴が混じっているのに気づく。
少し困惑したように力なく閉じられた瞼は、開く気配を見せない。仰のいた喉が時折苦しげに引き攣れていた。
足元が急に深い崖縁のように感じられ、フリオの膝がよろめいた。と。
背後から硬い手が身体を支えた。
「フリオ！　大丈夫か」
振り返るとカブトがこちらを見下ろしている。「ギドーバ片付けて来たぜ！」
肩越しにクワガーとテントウが駆けてくるのも見える。
「甲平……大作」
フリオは金色のネオインセクトアーマーを見上げた。「大作を、早く」
なんだかやけに、喋るのが億劫だ。
「判った。でもフリオ」
聞き終わる前に急に力が抜けて、視界が一気に眩めく。
カブトの手から滑り落ちるように、フリオの身体もその場に崩れた。
呼ぶ声が急速に遠のいていった。

４５．５話　「テオブロマ」（１１）（後書き）

敵は倒しましたが「もうちょっとだけ続くんじゃ」。
あと３話、宜しければお付き合い下さい。

45．5話　「テオブロマ」（12）

巨大移動要塞メルザードス内部で、マザーメルザードは控えているビークラッシャー三体を見下ろした。
キルマンティス、ムカデリンガー、ビーザックは身を竦ませる。
だが予想外に、満足げな声でマザーは囁いた。
「此度の作戦は失敗とはいえようやった。お前達の首、暫くは繋げておこう。だが覚えておれ、今度こそ次はないぞ」
「あ、有難き幸せ」
緑、青、黄色の頭が一斉に深々と下がる。
「判れば良い。下がれ」
マザーは鋏の手を振ってビークラッシャーを下がらせた。
不満げに恐竜武人ライジャが進言する。
「マザー。ピトモルテスの制御も出来ぬ上、ギドーバで加勢したにも拘らず負け越したビークラッシャーどもをお許しになるとは、些か甘すぎるのでは」
「この母に意見かえ。偉くなったものよな」
赤い目が凄む。ライジャは少し怯んだ。
「申し訳御座いません」
「判らぬか」
薄く残忍な笑みが昇る。「此度の戦いが今後の作戦の大きな手がかりとなった」
鳴声から発せられた、闇の波動。
降り注ぐ毒の羽。
そして、雨……。
「まあ見ておれ。今に判る」
ライジャに、というよりも闇の意志に宣言するように、マザーは呟いた。

雨音がする。
目を覚ますと、見慣れた病室だった。
「あ」
今まさに甲平がプリンをすくって、プラスチックの小さなスプーンを自分の口に運ぶところだった。
目の前で黄色と茶色が、ふる、と揺れる。
半分がた中身がなくなっているカップには、見たことのあるラベルが貼ってある。
「ごめん」甲平はばつの悪そうな顔をする。「フリオが貰ったお見舞い、勝手にいただいてる」
それで見覚えがあったのか。「どうぞ」
「フリオも食う？　まだあるよ。夕飯の時間過ぎちゃったし」
「うん」頷いて身を起こす。
肩が猛烈な抗議をして、左手で押さえて悶絶する結果となった。
「〜〜〜っ」
「またかよ。一気に動くなって」
「寝たら忘れてた……」
フリオは甲平の差し出すプリンのカップを左手で受け取る。
「傷、思い切り開いてたってよ。俺がお医者さんに怒られちゃったよ」甲平が口を尖らせる。
プリンを開け、備え付けのスプーンで掬う。「メンバーの代わりに怒られる、ビーファイターのリーダーの務め」
「こんなときだけリーダー扱いするなよなあ」
冷たく甘い卵の風味が口の中で溶けると同時に、段々頭もはっきりしてきた。
「そうだ。大作は？」
問うと、甲平の表情が曇った。
「甲平」
「……まだ」

口ごもる。
「何処？」
「いいから。自分も怪我人なんだからさ、大人しくしてろって」
「気になって寝られない」
フリオはベッドを降りる。
文句の多い肩を無視して歩き出す。
「判ったよ、待ってよ、スリッパくらい履けよ！」甲平がスリッパを持って追いかけてくる。受け取って履いている間に甲平が先に立って歩き始めた。
廊下は静まり返り、時折忙しそうに看護師が行き来する他は誰もいない。茶色の薄っぺらいスリッパをぺたぺた言わせる音だけが響いた。廊下の左側は外に面し、窓を打つ雫が外の水銀灯の光を受けて黄緑色に輝き、星のように流れる。
非常灯の横を通り、甲平は廊下の突き当たりまで歩いた。右手の部屋の引き戸が開かれ、中から淡く明かりが漏れている。
奥にももう一つ引き戸が開け放されており、時折、そこと正面突き当たりの部屋とを看護師が出入りしている。
二つの扉の間、廊下に置かれたソファに腰掛けている長い足の持ち主が顔を上げた。
大作や舞と同期のビーファイター、甲斐拓也だった。
「フリオ」
「拓也。いつニューヨーク支部から、日本に？」
「夕方着いたばかりだ。こんなことになっているとは思わなくて」
拓也は部屋の中を横目で覗う。
「ここ」
「集中治療室。先刻、手術が終わったばかりだから」
フリオは首を伸ばして部屋の中を覗き込む。
中心に据えられたベッドの上に、大作が横たわっていた。
ジャングルで仕留めた野生の獣を差し出されているようで、胸を衝かれた。酸素マスクの中で微かな喘鳴混じりに繰り返される浅い

呼吸と、ベッドを取り囲んでいる幾つかの機械の音が辛うじて、そこにまだ命があるのだと伝えていた。
冷たい汗に額を濡らし、頬の傷に白い絆創膏を貼られた顔は部屋の暗さで一層深く翳っている。点滴、それから無骨な指を挟んでいる、洗濯ばさみみたいなもの。確か体内の酸素を測っているのだと聞いた覚えがある。機械についている大小のモニタそれぞれが示すバイタルサインの見方などさっぱり判らないが、淡い光が不安を掻き立てる。
フリオは拓也を振り返る。
「大作は」
「手術は問題なく終わった。だが、まだなんとも……ちょっとややこしいことになっていて」
拓也は顎を手で支える。「毒を受け、その後で傷を負っている。それ自体はむしろ幸運だった――早期段階で、毒による肺水腫が深刻になるのを結果的に避けられた。だが傷自体が深く、また受けた毒の量も多いから未だ今後の影響も軽視できない」
「……」
フリオが黙り込んだのを見て、拓也は少し微笑んで見せた。
「よく判らないかな。ややこしい日本語だし、俺も正直あまり判っていないから説明としておかしいだろうし。まあ、とにかく油断できないってことだよ」
確かに完全な理解が出来たわけではないが、黙った理由としては少し違う。しかし、とりあえずフリオは頷いておいた。
「フリオ。君も大丈夫なのか」拓也は立ち上がりソファの奥へずれた。「疲れて見える。坐ったら。甲平、君も」
頷いてフリオは坐った。甲平は坐らずにこちらを見下ろす。
「俺は帰るよ。明日、学校あるし。大作先輩が目を覚ましたら連絡して」
「判った」拓也が頷く。
「じゃなフリオ、無理すんなよ。早く部屋に戻って寝ろよ」

甲平は小さく手を振って去って行った。
雨音が大きくなった。部屋から洩れる機械音も心なしか大きく聞こえる。
フリオは流れる雨粒を見ながら、大作の言葉を思い出していた。
インカの神様は、助けてくれる。
助けが要るのは今だ。窓を伝う流れ星では、願い事も届きそうにない。
横で不意に拓也が呟いた。
「俺が、もっと早く着いていれば」
フリオは首を左右に振る。
「舞が言ってた。少しずつ積み重なった、運命だって。一つ一つ責めてたら、最初になにを責めてたのか忘れるぐらい、きりがないって」
「舞が、そんなことを」
そう思えるまでに、舞も大作も、一つ一つを責める作業をしていたのだろう、とフリオは思う。生き返ったとはいえ目の当たりにした仲間の死に、その場に居合わせれば助けることが出来たかもしれないという仮説を抱くのは当然のことだ。
今の拓也が、そして自分がそうであるように。
それを言ってやるべきかどうか迷っていると、拓也は薄く微笑んだ。
「じゃ、その運命の積み重なりを一つ一つ壊れないようにより分けて、なにがあったのか逆に辿り着くのが、君の仕事なんだな、フリオ」
「……そうか」フリオは頷く。「そうかも」
と。
小走りに、しかし他の入院患者に配慮して音を立てないように近付いてくる足音があった。
初めは看護師のものかと思った。しかし少し様子が違う。
フリオは廊下の奥の暗闇を覗き込む。

そして――今まで見たことのないものを見た。

４５．５話　「テオブロマ」（１２）（後書き）

マザーのお考えは本編４７話「ＢＦの父　老師死す！！」の闇の波動獣ダーグリフォン誕生、及びその後の展開を示唆しているつもりです。ちょっと苦しいですけど。

作者に医学知識はさっぱりありません。
特撮ですのでなんとなく尤もらしい感じになってればいいやっとか思うのですが（すみません）。
色々ツッ込みどころがあると思いますが、とりあえず『レスキューファイアー』の最終回の１つ前の回でもご覧になって、広い心でお許し下さい……。『レスキューファイアー』は大好きです、念の為。

45．5話　「テオブロマ」（13）

白い空間に大作はいた。
羽ばたきの音がして顔を上げると、大きな鳥が翼を広げている。
逆光で黒く、鳥は嗄れた声で鳴いた。

――？Ｑｕｉｅｒｅｓ　ｖｏｌｖｅｒ？

「あんた、インカの神様か？」大作は不機嫌に眉を顰めた。「日本語で喋れよ」
鳥は鋭い目で大作を見据え、もう一度問うた。

――帰リタイカ？

日本語だった。
サービスに感謝。大作は肩を竦める。
「さあ……どうかな」
家を出て、流離って、ここまで来た。
脳裏に浮かぶ顔はある。けれど。
「俺より帰りたがってる奴がいるだろう。そいつを帰してやってくれねえかな」

鳥は大作の頭上を一度旋回して、長い首を振った。

――オ前ニ私ト共ニ往ク資格ハナイ。

言って、鳥は翼をはためかせた。
弧を描いて鳥の姿が小さく去ってゆく。
その後ろをもう一羽、小鳥が追ったように見えた。頭と羽先だけ

が黒緑色で、あとは燃えるようなタンジェリンオレンジの身体。
「！　待ってくれ」
よく見ようとして大作は後を追おうとした。
そのとき、不意に背後から両脇の下をひょいと持ち上げられた。
頬に海の匂いと、微かな髭の感触があった。
足が易々と地面から遠ざかった。
何処かで、小さな子供の声がする。涙の混じった声。
ずっとまってたよ。
なかないでひとりで、るすばんしてたよ。
声は――遠い記憶の奥底から響いていた。
抱き上げる手が耳元で囁く。
覚えのある声とは違う。頂を渡る風のような声だった。
――馬鹿野郎。
――戻って来い。

光を感じる。
下瞼に貼りついた重い瞼をどうにかこじ開ける。
窓から入る光が四角く眩しい。
逆光になった背中が見える。紺に白く染め抜かれた、丸に『魚』の一文字の入った半纏、頭には白いハチマキ。
ぼんやりと子供に戻ったままの頭で、大作は、それが遠い昔にやめてしまった呼び方だと気づかずに呼んだ。
――とうさん。
口の中が酷く渇いていたので、舌は膨れたような感覚でもつれた。

唇から掠れた空気が洩れただけだった。
しかし背中は振り返った。
「大作」
大作は目を見開いた。
一気に頭が覚醒した。
目の前にいたのは南米人だった。大作と隣り合ったベッドに腰掛けている。
口をぱくぱくさせていると、吸い口で水を飲ませてくれた。干乾びた砂漠だった口中と喉が潤うと、舌も概ね元に戻ったようだ。
「……フリオ、お前……日本に来たら、コスプレしなきゃならないって、ルールでもあんのか……」
胸から腹にかけて痛く重く、喉もやすりがけされたように痛む。
嗄れながらなんとか声は出たが、力が入らない。
フリオは半纏の両袖から指を出して袖を引っ張ってみせる。
「大作のお父さんが来て、これ初めて見たって言ったら、くれた」
襟に染め抜かれた『大漁』の文字。間違いなく大作の父・大鉄のものだった。その下は普通に、淡い緑の病院服である。
「どんなコーディネートだ、それ」
「ちょっと寒いとき、ひっかけるのに丁度いいよ」
「ああ、そう……」
大作は呆れて溜息をつく。「で、親父は」
「昨日帰った。漁があるからって」
そんなことだろう。「……煩かったろ、俺の親父」
「怒鳴ってたよ」
「当ててやるよ……『どうせこの馬鹿がなんかやらかしたに決まっとるんだ』」
「大当たり」
「やっぱりな」
「泣いてたよ」
「――」

大作はフリオを見る。
フリオはベッドに坐って大作を見下ろす。「人の子だからって親に説教するなら、親より先に死ぬような親不孝を、やってはいけない」
綺麗にやり返されてしまった。
「大袈裟な……生きてるじゃねえかよ」
「集中治療室に二日、ここへ移ってから目が覚めるまでに二日、うち心停止一回」目の前で、ごつい指輪の嵌った指が理路整然と折れる。「なにか質問は？」
「――」
先刻までの夢が甦る。
抱き上げる手の感触。海の匂い。胸の奥に消え残る小さな子供。
治ったら酒でも買って、改めてちゃんと顔を出しに行こう。
ついでに、せっかく質疑応答されたので、とりあえず聞いてみた。
「……ハチマキはなんでしてるんだ」
「髪が伸びたから」
答えは簡潔だった。
「判り易い講義をありがとよ、Ｐｒｏｆｅｓｏｒ」
「Ｄｅ　ｎａｄａ．　こちらこそ『Ｎｅｃｉｏ』などと呼んでくれてどうも」
ちゃんと聞こえていたらしい。
「いやいやこちらこそ。わざわざ日本語訳して返してくれて」
顔を見合わせてにやりとする。
応じて、しかしふとフリオの笑みが少し曇った。
「大作も、鳥を見た？」
「――ああ」
大作は頷く代わりに目を伏せた。「二羽。黒いでかいのと、オレンジの小さいのと」
フリオは少し俯く。
背後の窓の外で、今日も雲が白く空を覆っている。

葉を落とした梢に小鳥の影が寒そうに震えた。
「拓也が言ってた。毒の後で傷を負ったから、肺水腫が深刻になるのを、避けられたって」
呟く。「あの鳥――彼は、それを知っていたのかな」
肺水腫は血中水分が肺へ流れ込むことによって起こる。
対処法としては体内の水分の排泄を促して血中水分を下げることだが、応急処置として瀉血、つまり体内の血液そのものを減らす方法もある。
樹木医の試験範囲は多方面で、蜂や蛇など山に棲む生物の多くが持つ神経毒についての知識も詰め込んだことがあった。今更ながら出てくるものだ。
考古学者にその知識があるかは――どうだろうか。ただ、確かにタイミングの良すぎる展開ともとれる。
「救えなかった。今度も」
逆光でフリオの顔が昏い。
「あれは、メルザード怪人だった」大作は黒曜石の目を正視して言った。
「でも彼は、人の言葉を話した。それに一明君のことも」
「疑問形だったぜ。だいたい元々、人間の言葉を話す怪人ばっかだろ」
「……」
そう。
あれはメルザードの造りだした、人ではない生き物だ。
たとえ、自然と心を通い合わせてある程度メルザードの奇襲の気配を読むフリオがピトモルテスの動きへの対応に遅れたのに対し、間に合ったのが大作だったとしても。
間に合った理由が――人間の中には身勝手で理不尽でどうしようもない父親が五万といることを大作は知っていて、気を許さなかったからだとしても。まあさすがに、無茶苦茶で頑固で束縛の大きい自分のクソ父親でも、今になって感謝している部分は大きく、問題

があるとまでは言えない。しかしやはりあのとき神経を過敏にさせたのは、軋轢の経験だろう。
あの鳥の中にいた魂の取った行動が極めて人間的、裏を返せば生物学上あまりにも不自然な行動だったが故に、自然を感じるフリオは、感じなかったのだ。
しかしそれが判らないのは、フリオが良い父親だからに他ならない。
だから知る必要はない。
結論だけ正直に、大作は口を開いた。
「中身がどうであれ……子供を手にかけるような奴は、その時点で、人間じゃねえよ」
「それは、全面的に賛成」
フリオが手を挙げた。
表情が少し穏やかに凪いだ。「でも、そうすると、預かってきたチョコレートは無駄？」
「動きを止めたろ」
「心が、人に戻らないのに」
「鳥にカカオは猛毒」
フリオの目が丸くなる。「そうなの？」
「犬にも猫にも、たいがいの動物がそうだとよ」
溶血作用があるそうで、こちらはつい最近、旧友の動物学者から雑談の折に聞いたばかりの話なので覚えていた。
人よりも大きい鳥に人間が食べる程度与えて効果があるのかどうかはやや怪しいが、それでも消化能力が人間よりは落ちそうではある。
「まあ、古代インカ帝国で神々の食物と言われたもんだし。アンデスの神様が守ってくれたんだろ」
言うと、フリオはあからさまに謗りを含んだ目線でこちらを見下ろした。
「……それ、アステカ」

「え？」
「チョコレート、アンデス文明じゃなくて、マヤ文明」
「……あれ？」
「台無し」
「台無しって……」
えらい言われよう。
「まあ、あれだ……寛大な心で許してくれよ、そこは。神様なんだから」
苦し紛れにそう言うと、神の代わりに、地球の裏側から遣わされた民が寛大な心で許し給うた。
「じゃ、そういうことで」

４５．５話　「テオブロマ」（１３）（後書き）

アンデス文明とマヤ文明には繋がりもあるっぽいですが……
まあ、あまりに大作がいいところを持って行きすぎなので、ちょっと下げておこうかと（笑）。

次で「テオブロマ」最終回です。
そのあとにこの一連の怪しいスペイン語の解説なぞできればいいな、と思っております。今回ので、大体判っていただけたとは思うのですが。

45．5話　「テオブロマ」（14）

翌日、フリオは一足先に退院した。
医師は難色を示したが、これでも、怪我をしたとはいえ病院などという閉鎖空間でよく今まで辛抱した、僕、偉い！　ぐらいの気持ちである。古代アンデス展の会場にすら辟易したというのに。
それに、その古代アンデス展が明日には終わるので顔を出して、後片付けの指示もしなくてはならない。
やることは沢山あったが、とりあえずコスモアカデミア日本支部・ビートルベースへ顔を出す。
「フリオ。もう大丈夫なのか」
顔を上げて迎え入れたのは拓也だった。
フリオは頷いて、ポケットからビーコマンダーを出す。
「大作から言付かってきた。ピトモルテスの鳴き声、繰り返し浴びると、重甲解除された。解析して欲しい、って」
「判った。もしかすると今後のメルザードの攻撃を予測して、新しい武器が開発できるかも」
拓也はビーコマンダーを受け取り、ためつすがめつして、ふと顔を上げた。
「そうだ。君にムービーメールが来てたよ。メインルームで見れるから」
「ムービーメール」
聞き返すと、拓也は少し含みのある笑みを浮かべた。

メインルームに入ると甲平、健吾、蘭、それに小山内博士が顔を上げた。
「フリオ！」
「退院しちゃったのか、無茶だなあ」甲平が軽く肩を叩く。

「った」
「ほらー」
フリオは反射的にしかめた顔を、どうにか解いて見せた。「大丈夫」
「あたし達、今から大作先輩のお見舞いを兼ねて様子を見に行くところだったのよ」
蘭の言葉に健吾が頷いて、紙袋を持ち上げて見せた。
「大作、暇そうにしてたから行ってあげてください。それより、僕にメールが来てたって」
「ああ」小山内が頷いてモニタを振り返る。「ビット」
『オッケー。いつでも再生できるよ』
画面の中で人工生命体・ビットの愛嬌のあるコンピュータグラフィックがサムズアップして見せる。
フリオはモニタの前のキャスターつきの椅子に腰掛ける。
「じゃあ、俺達は行くから、ごゆっくり。っと、これ」
健吾が紙袋からポンチョを取り出す。「君の荷物からゆいちゃんが用意してくれて、持っていこうと思ったんだった。寒いから着ておいたらいいよ」
そして頭からフリオに被せる。
四人は少し顔を見合わせ、そして部屋を出た。
一人取り残され、フリオはポンチョを頭から被ったまま、顔だけ出してビットに言った。
「再生を」
『オッケー』
画面が切り替わる。
荒い画像の中にアップで映ったのは見知らぬ美女だった。
『Ｈｏｌａ．　初めまして、フリオ。南米に居るのになかなかお会いする機会がなくて残念です』
画面の中で美女がにこりと微笑む。
優しいが媚びた様子はない、どこか気品のある女性だった。

『私は羽山麗、動物学者です。舞の前にレッドルとして、拓也や大作と一緒に戦ってました。今は南米を中心に、絶滅危惧種動物の保護活動をしています』

フリオは目を丸くする。

初代ビーファイター・レッドル。この女性が。

画面の向こうで麗は話し続ける。

『今回あなたにメールしたのは、ついこの間、日本に里帰りして大作や舞に会ったとき、あなたを見かけたのがきっかけです。

私はその足で飛行場に向かって南米に戻るところだったんだけど、おかげですごく大きな荷物を持たされることになっちゃったわ。今からその送り状を届けます』

麗はそう言って微笑むと、画面の外へはけた。

懐かしい日差しと土の色が一杯に映る。

中央で、ずっと逢いたかった人達の顔が手を振っていた。

自分の家の前。妻が微笑んでいる。『Ｊｕｌｉｏ』

その横で。

息子は真新しい自転車のハンドルを握っていた。

メタリックな黄色と青の模様が誇らしげに強い日射を照り返している。

この自転車は――

フリオは瞬いた。色々なことがありすぎて、忘れていた。

嬉しさと恥ずかしさがない交ぜになった顔で、息子がはにかんだ。

『Ｐａｐ？，Ｇｒａｃｉａｓ．』

ああ、少し背が伸びた。

下の前歯が一本抜けて、生え変わろうとしている。

右膝の上には、虫に刺されたところを掻いた跡。

妻が笑いながらしゃがんで、息子に何か耳打ちする。息子はこくりと頷くとこちらへ向き直り、口を開いた。

『Ｖｕｅｌｖｅ ｔｅｍｐｒａｎｏ ｃｕｉｄａｄｏｓａｍｅｎｔｅ．Ｐａｐ？ ｌｏ ａｍａ．』

たどたどしい言葉。
画面が滲んでいった。
手の甲に雫が落ちた。
故郷から一番遠い異国の部屋で一人取り残されるのが、こんなに幸せなことだったのは初めてだ。周到に用意された幾つもの優しい沈黙。機械の中の人工生命体ですら、空気を読んでプログラムの陰に身を隠してしまったらしい。

Ｑｕｉｅｒｏ　ｖｏｌｖｅｒ．
――”帰りたい”。

想いは変わらない。けれど、帰る場所が今、ひとつ増えた。
そして帰る場所を護るのが、今の仕事。
ポンチョを顔の前へずり降ろし、すっかり上半身を覆う。染み付いた懐かしい匂いが身を包む。太陽と埃と、遥か昔に滅んだ空中都市の上を抜ける風。いつもの銘柄の安い石鹸。数年前に指輪を嵌めてやった細い褐色の手。いつも同じところで間違える歌。
複雑に織り込まれた異国の織物越しの肩が震えるのを、誰も見なかった。

林檎の皮がするすると、床を目指して螺旋を描きながら下がってゆく。
舞の手の中で滑らかに、ナイフが林檎を剥く。
ベタなシチュエーションすぎだろう、と大作は思うが、舞が楽しそうにしているので黙っていた。
ふと舞が顔を上げる。「もうちょっと待ってね」
「ああ」
そんなにじっと見ていただろうか。やや気恥ずかしくなって、視線を彷徨わせる。

隣のベッドは今朝、空になったばかりだ。
「今頃、フリオ、ムービー観てる頃かな」舞が笑う。
「かもな」
大作は頷いて、窓の外へと目をやった。
鳥の群れが旋回する空の向こう、雲が割れて、幾筋もの光の梯子が地面へと伸びていた。

（完）

４５．５話　おまけ「テオブロマ・ビター」（前書き）

４５．５話「テオブロマ」読了後にお読み下さい。

45．5話　おまけ「テオブロマ・ビター」

わたしたちのことを思い出してくれるたびに、わたしたちは目を覚まして、お前たちに会えるんだよ……

――メーテルリンク「青い鳥」

どこまでも白く。
なにもない空間のように、その場所は見えた。
彼はここが好きだった。安閑とした霧の向こうは性に合わず、独りここへ訪れた。何をするでもない。ただぼんやりと人の流れを見ていただけだが、彼にはそれが面白く思われた。
それにこの場所では時折、空間が淡く揺らめいて微かに、かつて己が存在した世界が見える。他の者たちにとってはそれが辛いのであろうが、ほんのわずかな時間だけしか存在が許されなかった彼にとっては、ただ興味深かった。
この場所には門番が一人居たが、門番も彼がそこにいることを特に咎めるでもなく、ただ嗄れた声で一言「お前はあちらから来る者には見えない」と言っただけだった。彼もそれで特に構わなかった。

多くの人がその場所を通った。
時には通らずに、引き返した。
通る人に応じ、門番は様々な姿に形を変えた。人であったり動物であったりしたが、多くは鳥の姿をしていた。阿比や夜鷹、雀、鴉。
そして通る人に応じ、門番は様々な言語で、しかし同じ質問をする。

彼はその場所の向こう側に居るのだから、かつて彼も同じ質問をされたのだろうが、彼はなんと答えたか覚えていなかった。
ただ、一度こちら側へ渡ると、知らない言語でも何故か意味が判るようだ。おかげで、人によって様々である質問の答えが、聞き取れないということもなく楽しめた。

その日、門番は大型の黒い鳥に姿を変えた。
彼はふと顔を上げる。
やってくる青年の姿に見覚えがあった。彼は、青年と拳を交えたことがあった。
門番は翼を広げ、嗄れた声でいつものように問うた。

――帰りたいか？

青年は頷く。

――帰りたい。

鳥は青年の頭上を一度旋回して、長い首を振った。

――お前に私と共に往く資格はない。

鳥は翼をはためかせた。
青年が鳥の後を追う。

――待ってくれ。
――僕は帰る。
――帰りたい。
――帰りたいんだ！

彼は青年の言葉を聞きながら鼻白んだ。
何故か初めて面白くないと思った。青年から彼の姿は見えないのを忘れて立ち上がる。
そのとき、不意に声が響いた。
声にも彼は覚えがあった。

――馬鹿野郎。
――戻って来い。

声の方角で青年は、鳥の往く先は彼の帰るところではないことに気づいたようだった。
彼は青年が踵を返し去って行くのを見た。

青年の姿が消えたところで彼は鳥に話しかけた。
「お前の質問には不備がある」
鳥は問う。

――どこに。

「帰りたいか、と聞いてから、連れて『往く』かどうかの話をすれば、『往く』方向と『帰る』方向が同じだと思い込むものだろう。今の男のように」

――そう聞こえるのは、

鳥は嗄れた、感情のない声で答える。

――『往く』先へと近付いている者だけだ。
――『帰る』しかない者には、ちゃんと『帰る』方向が判る。

人の所為にしているだけではないのか、それは。
彼は肩を竦めた。「ならばなぜ問う。見れば貴様には判るのだろう、『往く』者か『帰る』者かは」
鳥は話し続ける。

――『往く』べきでないにも関わらず、『往く』ことを望み、来てしまう者もいる。
――『往く』方へと傾いているが、『帰る』意志の強さで戻る者もいる。
――肉体は魂、魂は肉体。別物ではない。
――よって意志は常に問われるべきである。

判ったような判らないような答えだった。
すると鳥が問うた。

――彼を帰したいと思ったか？

脳裏に一瞬過去が甦る。
鋭い拳、放たれる閃光。久しく忘れていた、魂が研ぎ澄まされるような戦いの感覚だった。
そうか。
青年の答えが面白くなかった理由は、これか。
しかし彼は首を左右に振った。胸でペンダントが揺れる。
「俺の決めることではない」

――そうか。

鳥は言うと、白い虚空を旋回した。
空間が揺らいで、少しだけその先の世界が見えた。

見たことのないどこか異国の風景だった。
日差しが強い所為か、すべてのものが色鮮やかに見える。
髪の長い女性が三脚を立て、ビデオカメラを設置している。
母親とその息子らしい二人組が、カメラの前に並んだ。髪の長い女性はファインダーを覗き込んで親子にピントを合わせ、スイッチに手をかける。

――このレンズに向かって喋ってね。用意、スタート。

母親らしき女が手を振る。

――フリオ。

息子らしき少年は真新しい自転車のハンドルを握って照れたようにはにかむ。

――おとうさん、ありがとう。

母親が息子に耳打ちした。
息子は頷いて、舌足らずな口調でたどたどしく話した。

――きをつけて、はやくかえってきてね。おとうさん、だいすきです。

――はい、ＯＫ。

女性がカメラのスイッチを切った。
同時に光景も淡くなって、消えた。

あとには元通り、寂寥と白い世界が広がっている。しかしこれほど広く思われたのは、初めてだった。
「奴の帰る場所か」
知らず呟いていた。
鳥が問うた。
――帰りたいか？
彼は答えた。
「愚問だな」
得られるものは何だったのか。
得られなかったものは何だったのか。
得たかったものは――
いつか得る日がくるだろうか。
いつか、己と同じ顔をした男が、他の誰もがそうであるように門番の問いに答えてここを通る。そのときに、その男なら己の問いにも、望む答えをくれるような気がしていた。
だがその男がここを訪れる日が一日でも先であるようにと願う己がいることを彼は心のどこかで感じ、何故か、それが少しだけ、嬉しかった。
彼は静かに踵を返した。
白い空間に背を向けて霧の方へ戻り始める。
頭上の黒くつばの広い帽子が白い空間に影を落とし、足元で黒いコートの裾が翻った。

４５．５話　おまけ「テオブロマ・ビター」（後書き）

ちなみに、本文中にて補足できなかった言葉をこちらで補足させていただきます。簡単なものも念の為。

・Ｈｏｌａ！　→やあ！　こんにちは！（Ｈｅｌｌｏ　と同じで時間を問わず使えます）

・Ｇｒａｃｉａｓ　→ありがとう

・Ｄｅ　ｎａｄａ　→どういたしまして

・「？Ｔｅｎ？ａ　ｕｎａ　ｆｏｔｏｇｒａｆ？ａ！」　→「彼は写真を持っていたんだ！」

さて。

以上をもちまして、架助のビーファイターカブト小説、全て終了です。

ここまでお読みくださいまして、そしてビーファイターをお好きでいてくださいまして、本当にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8967l/

ビーファイターカブト　大作とフリオと幕間で

2011年3月20日00時25分発行